

21世紀社会デザイン研究学会第5回大会

公開講演会議事録

2010年12月5日(日) 14:00~16:30

跡見学園女子大学 文京キャンパス 2号館 1階ブロッサムホール

テーマ：自然との共生—都市から自然を考える

主催：跡見学園女子大学サステイナブルビジネス研究会 (ASBI)

共催：21世紀社会デザイン研究学会・跡見学園女子大学大学院マネジメント研究科

講師：萩原 なつ子 (立教大学 教授)

村上 雅巳 (跡見学園女子大学 准教授)

和田 慎一 (東京都環境局 自然環境部 緑環境課課長)

朝田 くに子 (株式会社風土倶楽部 代表取締役)

那須 守 (清水建設株式会社 技術研究所 都市緑化グループ長)

コメンテーター：北山 晴一 (21世紀社会デザイン研究学会会長)

コーディネーター：村田 あが (跡見学園女子大学 教授)

目次

1. 開会	1
2. 講演	4
2.1 萩原 なつ子氏 (立教大学 教授)	4
2.2 村上 雅巳氏 (跡見学園女子大学 准教授)	10
2.3 和田 慎一氏 (東京都環境局 自然環境部 緑環境課課長)	16
2.4 朝田 くに子氏 (株式会社風土倶楽部 代表取締役)	20
2.5 那須 守氏 (清水建設株式会社 技術研究所 都市緑化グループ長)	26
3. ディスカッション	31
3.1 コメント：北山 晴一氏 (21世紀社会デザイン研究学会会長)	31
3.2 討議	34

1. 開会

村田：それでは始めさせていただきます。コーディネーターを務めます跡見学園女子大学の村田と申します。よろしくお願いいたします。

まず、本日の講演会の主催・共催をお話しさせていただきます。

講演会のテーマは「自然との共生 ― 都市から自然を考える」といたしました。跡見学園女子大学サステナブルビジネス研究会、通称 ASBI と申しますがこちらの共催でございます。21 世紀社会デザイン研究学会および跡見学園女子大学大学院マネジメント研究科共催でございます。ただ今から始めまして 16 時 30 分終了予定でございます。

それでは、本日のタイムテーブルですが、ただ今から、最初に 30 分ぐらい、萩原さんより、口火を切っていただくお話をいただきます。そしてその後、村上さん、和田さん、朝田さん、那須さんと続きまして、プレゼンテーションをしていただきます。そして、予定では 15 時 35 分から 15 時 45 分ぐらいに休憩を入れまして、その後、コメンテーターの北山さんからご発言をいただきます。それを元に、15 時 55 分から 16 時半まで、ディスカッションの時間をもうけたい。このように考えております。

それでは講師の皆さまのご紹介をさせていただきます。

本日は、先生と呼ばずに、皆さま「さん」付けで呼ばせていただくということで進めさせていただきます。

まず、皆さまから、向かって左側から「萩原なつ子」さんです。

萩原：萩原です。よろしくお願ひします。(拍手)

村田：「都市環境をデザインする一町を耕す人々との出会いから 25 年」と題するお話をいただきます。プロフィールをご紹介させていただきます。

立教大学社会学部及び 21 世紀社会デザイン研究科の教授でいらっしゃいます。財団法人トヨタ財団アソシエイトプログラムオフィサー及び宮城県環境生活部次長、それから他大学の助教授等を経られまして 2006 年 4 月より現職でいらっしゃいます。日本 NPO センターの常務理事でもいらっしゃいます。

それではお隣、村上雅己さん。

村上：村上です。よろしくお願ひします。(拍手)

村田：跡見学園女子大学マネジメント学部観光マネジメント学科准教授です。講演のテーマは「グリーン・ツーリズム―本物体験のすすめ」です。

運輸省、現在の国土交通省に入省されまして、大臣官房観光部整備課、それから外務省の在モロッコ日本国大使館理事官、そして国際機関日本 ASEAN センター観光部長代理、国土交通省四国運輸局企画部観光課長、国土交通省総合政策局観光部観光地域課長補佐、上越市産業観光部観光局長、観光庁国際観光政策課長補佐、観光庁国際交流推進課観光渉外官を経られまして、本年 5 月から現職でいらっしゃいます。

続きまして和田慎一さんです。

和田：和田でございます。よろしくお願いいたします。(拍手)

村田：現在、東京都自然環境部緑環境課長です。ご講演のテーマは「東京都における緑の保全—保全地域と東京グリーンシップアクション」です。都庁に入庁されてから下水道、文化、消費者、リサイクルなどの業務に従事されまして、2009年環境局自然環境部緑環境課長になられまして、現在に至っていらっしゃいます。

続きまして朝田くに子さんです。

朝田：朝田です。よろしくお願いいたします。(拍手)

村田：株式会社風土倶楽部代表取締役、みつばち百花代表理事です。本日のご講演のテーマは「ミツバチの視点から見えてくる風景」でございます。先ほどお話しさせていただいて、分かったんですが跡見の出身でいらっしゃるそうです。

2005年8月8日、8、8の日に東京はちみつクラブを設立されまして、ワインのようにはちみつを楽しもうや世界各地のはちみつを知るセミナーや、蜜原植物を探りながら歩くハニーウォーク、はちみつヌーボーパーティなどを開催されています。

それらで得られた知識や情報をもとに2010年1月から、名称をみつばち百花と改められて、ミツバチのための蜜原、花粉原の植物を増やそうという活動を本格的に開始されました。遊休地などを活用した「ミツバチと一緒にまちづくり」を提唱されまして、岩手県、福島県、長野県等の地元の団体さんと連携されまして活動を広げていらっしゃいます。三鷹市、国分寺市、国立市で、ミツバチの生態や花と虫の関係性などを分かりやすく伝えるためのセミナーなども開催されています。そして、都市部のモデルとなる庭や畑づくりを行っていらっしゃる方でございます。

続きまして那須守さんです。

那須：那須でございます。よろしくお願いいたします。(拍手)

村田：清水建設株式会社技術研究所都市緑化グループ長でいらっしゃいます。本日は「企業と都市の自然再生」と題してお話をいただきます。ご専門は緑地環境計画と評価でいらっしゃいます。

清水建設株式会社に入社されまして、技術開発センター自然生態系グループを経られまして現職であります。2005年以降、東京大学都市工学科や京都学芸大学バイオ環境学部等で非常勤講師もされています。生態系の保全、緑地環境計画評価技術の研究開発に従事されています。ハウステンボス、鄭州市生態系回廊計画の環境解析・環境計画をご担当でいらっしゃいます。現在は緑地の整理、心理的評価、歩きたくなるまちづくり、新都市ハウジング協会等で研究開発を行っていらっしゃいます。主なご著書に『歩き

たくなるまちづくり』『AHPとコンジョイント分析』それから『ルーフトップ緑苑革命』などがあります。環境部門の技術士でいらっしゃいまして一級建築士及び千葉県被災建築物応急危険度判定士、環境カウンセラーでいらっしゃいます。

そして、右側は本学会の会長の北山晴一先生でいらっしゃいます。

北山：よろしく申し上げます。(拍手)

村田：北山さんは、皆さまご存じの方でいらっしゃいますので、省略させていただきます。

それでは、皆さま方に一度下に降りていただきまして、萩原さんのお話からお願いしたいと思います。

2. 講演

2.1 萩原 なつ子氏 (立教大学 教授)

都市環境をデザインする—町を耕す人々との出会いから 25 年

萩原： はい、あらためて皆さん、こんにちは。日曜日の今日は小春日にもかかわらず、ご参加いただきましてありがとうございます。

私のほうからはですね、あの、これからパネルディスカッションをしていく前の皆さんの話に先立って口火を切るという役割でお話をさせていただきたいと思います。大体 20 分から 30 分の間、時間をいただきたいと思います。

最初に私がここに登場するきっかけを作ってくくださったのは北山先生なんです。北山先生が、私が 1990 年、今から 20 年ほど前に出した本、『それ行け！YABO—こどもとエコロジー』は、実は修士論文を本にしてくれるという話がありまして、リサイクル文化社から出した本です。

この本を北山先生が、私が立教大学に入るときに、一応出したものだというごらんいただいていたしまして、都市の中で農業をしているグループを観察しながら書いた修士論文で、今回のテーマにはその話がぴったりくるのではないかということでご推薦いただいて、ここに登壇しているというものです。

『それ行け！YABO』というのは、「やぼ耕作団」という名を付けた団体が、1980 年代、1985 年からおよそ 10、20 年ほど、日野市あたりで町を耕しておりました。彼らはもともとは「やさ農場」という茨城で、農園をやっていた人たちなんですけれども、そこに都市から多くの方たちが、縁農、農業を手伝いにきてくれた。しかし、彼らはそれに対してちょっと違うんじゃないかというふうに思い始めまして、特に代表の明峰さんは「都市の中でこそ農業が必要なんではないか」という確信を持ちまして、日野市に入り込むわけで

す。1985年、もうちょっと前からなんですけどね。

都市を耕す。その街を耕すことによって、そこから何かを発信していく。例えば生き方であるとかライフデザイン、まさに21世紀社会デザイン研究学会になっていますけども、どう社会をデザインしていくのか。あるいは自分自身のライフスタイルをデザインするのか。その基本に農業を置いていたということです。

そのやば耕作団との出会いというのは、私の経歴の中にトヨタ財団のアソシエイトプログラムオフィサーというのがあると思いますけども、トヨタ財団が1979年から市民の研究活動にお金を出すというプログラムを持っておりました。大変、今から30年以上前の話です。市民こそがその地域を調べて研究して課題を発見してその課題を解決していく。そして、自分たちだけでなく行政や企業によりいろんな人たちと協力をし合いながら、その地域社会に課題を解決していく。そういったものにお金を出していたプログラムなんですけど、その第3回目の助成対象チームだったわけですね。

私は当時、大学院に、子どもを背負いながら、すぐ近くのお茶の水女子大学の家政学部というところの大学院に入りまして、修士論文のテーマが「こどもとエコロジー」だったわけです。こどもとエコロジー、それはやはり、次の世代に対して私たちはどういう自然環境あるいは社会環境を残していくべきなのかという問題意識の中で大学院に入ったんですが、そのときの、師匠が文化人類学者の原ひろ子さん。その原ひろ子さんが、トヨタ財団の選考委員をなさっていて、あなたこういう団体があるわよと、あなたがやろうとしていることにぴったしじゃないかしらということでご紹介いただいて、1年間子どもを連れながら入り込んで、彼らの農作業に加わりました。

都市の中で農業をするということは非常に難しく、特に農業出身者でない限り農地を得ることができません。ですので、とにかく休耕田を、あるいは耕されていないところに行って、その持ち主のところへ行って、お願いですから貸してくださいということから始まります。貸してもらって、耕して、さあこれから作物ができるぞとなったところで、宅地化するから返してくれということの繰り返しでした。

しかし、彼らはそれでも耕していくことに意義があるということで耕し続けてました。もちろん無農薬、有機農業ということを目指していたわけですから、まわりの農薬を使っている人たちにとってみると嫌な会の存在であったことは確かです。ですけども、きっと、今自分たちがやっていることが将来大きな意味を持つんだというふうに、大きな夢を持っていた人たちでした。都市の中でこそ農業をという、どういうことかというやはり食べもの、大地と交流しながら自分たちの食べるものを作っていくということが、その人のやっぱり生きる力につながっていく、というところにあつたように思います。

そこに通っていた人たちは、例えば上野の谷根千で働いている方たちがバイクで駆けつけたりとか、ほんとに毎日長時間労働をしている方たちが土日に来て、そこに触れることによって自分の安らぎを得たりとか、そういう場としても活躍をしていたのです。

私はそこに入ってどういうことを考えたかということ、やはり、土地を持つことはできな

いけれども、自分たちのできることをやっていく。それを示していくことの重要性みたいなものをそこから学ぶことができました。ライフスタイルをどういうふうに変えていくのか。自分たちのできるところから、まずは自分たちが毎日食べるものをちょっとでもいいから作っていきこうと、そういうところから始まったように思います。

私がそういう環境の問題に関心を持ったもっと大元はと言いますと、私、山梨県の出身ですが、山梨県から東京に出てきたときにまず何が困ったかという、水が飲めなかったわけです。井戸水を飲んでいて人間が、塩素殺菌の水を飲むと、これは水ではないと。そして結果としてファンタやコーラを飲み続け、身体を壊し、内にある自然を壊してしまっただけですね。本当に苦労いたしました。

水が飲めない。それから果物も食べれない。例えば、皆さん、モモって、モモは柔らかいもの、柔らかいモモがモモだと思う人。堅いモモだと思う人。あのね、モモはね、堅くないモモじゃないんですね。これはやっぱりね、文化だと思います。山梨県ですからもう私たちは、「おばさーん、モモ頂戴」とかって言ってモモをこうもいいですね、当時農薬なんか使っていない時代でこうやって毛を取ってがぶっと。だから、リンゴより堅いんですよ、モモって。カキンというのが、モモなんです。

ですからこれはやっぱり文化だと思うんですが、東京に来てこまっちゃったのが、お手を触れたらお買い求めくださいって書いてあったんです。つまり、触れると柔らかいから手の跡がついちゃうから買わない方がいい。でも、これはまた困るわけです。私たちは後ろを見てこれが甘いかわかないかわかるわけですね。これが経験知というものなんです。だからそういうものが活用できないというの、東京の八百屋というものに対して非常に困りました。それから、ほとんど買うということがなかった生活だったので、何でモモに100円も出さなきゃいけないんだとか、何でキュウリに1本30円も出さなきゃいけないかと思ったら、どんどんまた食べられなくなったという、そういう状況があります。

先ほどの水の関係で体を壊し、このままでは大変だということがあって、自分の体と向き合ったときに食べるものものというのから向き合って、そしたら荻窪に「ほびっと村」という今でも続いているそうなんですけども、有機農業や無農薬のもの、あるいはこれから日本の一次産業を考える会といったものがあって、そこで勉強を始めたのが1976年ぐらいの話です。ですから、今から三十数年前の話になりますが。そこからやっぱり都市に生きる私たちが、どういうふうに自然と向き合うのか。あるいは特にその食べものを通してだったのですが、食べるものというものをどういうふうに考えていくのか。そのときにやはり一次産業を大事にしていかなきゃいけないんじゃないかというところから、その農業というものに関心を持っていったわけです。

やば耕作団と出あったことによって東京の中でも心意気さえあれば、気持ちさえあればやっていける。あるいはそういったことに共感をしてくれる農業の方たちもいらっしやる。そして、彼らは日野市とタイアップしながら、都市のマスタープランを作っていくってところまでいくわけですね。だから最初の1歩は自分たちの食べるものを作ろう。都市の中

でこそ農業を、だったんですけれども、それが大きな力にやがてなっていくというふうなものになっていったと思います。

もう1つ、トヨタ財団で出会ったのはやば耕作団だけではありません。都市の中で鳥の研究をしていた「都市鳥研究会」というのにも出会いました。この都市鳥研究会は、後に都市鳥という言葉で定着させたグループです。何でも言ったもんが勝ちという感じですけど、都市の中になぜこんなに、本当はどっかに飛んで行かなきゃいけない鳥がとどまるようになったのか。そういう簡単な疑問から都市鳥研究会が始まりました。それからもう1つは、なぜこんなに銀座にカラスがいるんだという疑問から始まった研究です。

都市の中になぜ鳥がとどまるようになったかという、室外機です。都市が全体にあっただかくなっていった。だから、鳥たちは都市の環境をうまく活用してそこに住みついたということですね。ですから、鳥の目から見たときに、今日は、自然、都市から見た自然なんですけども、鳥の目から見ても都市というのは、実は、住みやすい環境になりつつあるんだっていう、そういう発見がありました。

それから、じゃあ、なぜカラスが増えてしまったのか。カラスはとてもみんなから悪者扱いされるんですけども、彼らはですね、じゃ、銀座に朝、集結しようということになって、朝銀座に集まるわけです。そうしましたら、当時は1980年代ですから、いけいけどんどの時代で、銀座にはたくさんのごみがあふれていました。

朝行ったところ、カラスと浮浪者の戦いというものがあったわけです、そこには。まさにその都市を象徴するような。たくさんそこにあふれたごみに、まずどっちが勝つと思いますか。浮浪者とカラスのどっちが勝つでしょう。浮浪者のほうが先に食べると思う人？ カラス？ やっぱ浮浪者ですよ。(笑)

やっぱり人間のほうが強いんです。浮浪者がこう行って、何か余ってるものいっぱい食べながら、私も行ったんですよ、現地調査に、じーっとカラスが見てるわけですね。浮浪者が食べ終わると、カラスがかんかん、かんかんこう行って食べるわけです。

彼らはそのときにカラスが悪い、悪いっていうふうに言われてたんだけど、ちょっと待てよ。こういう状況を作ったのは人間じゃないかということに気付くわけですね。やっぱり、人間がこんなにたくさん残飯を出すからこういう問題が起きるんだと、カラスが悪いわけじゃないか、ということから何をしたかという、提案をしていくわけですね。まず、銀座のごみ収集を早くしましょう。それから、とにかく残飯を出さないようにしましょうと提案していったりしたんですね。ですから、どうしてカラスがここにこんなに多くなったのかって疑問から研究を始めていって、提言につながっていった。それはやはり都市に住んでる鳥の目から見たときに、その都市環境というものが違う形で見えてきたい例だと思います。

もう1つは、ちょっと都市っていうところを離れますけども、「行徳野鳥観察舎友の会」というところがあります。ここは三番瀬でも大変有名になりましたけども、行徳野鳥観察舎のところに、80ヘクタールだけ残ったところがあります。それも全部埋め立てられてし

まった。都市化されてしまった。だけど、どうしてもその 80 ヘクタールを残したい。残したんだけど、残念ながらそこには水鳥の姿がなくなってしまった。そこでトヨタ財団の助成で、トヨタ池を作るわけですね、トヨタ財団の助成だったんで。

そうしたところ、そこに水鳥たちがやってきた。彼らはこういうふう思ったんです。私たちは水鳥を呼ぼうと思ったんだけど、実は鳥たちも協力してその都市の環境を、復活させようとしてくれたんじゃないか。私たちは、人間だけっていうふうに思うと、そうじゃなくてそこにある鳥や生物、そういったものたちにも協力してもらって私たちの都市環境というのは成り立っているんじゃないかということ、その代表をなさっていた蓮尾さんという方がおっしゃっていて、私はそのときにやはりそのとき、都市の中の自然ということ考えたときに、やっぱり、人間だけではなくてそういう動植物たちにも一緒に協力してもらいながら都市の環境をつくっていくということの大切さを学びました。

もう1つはですね、鳥山研究会というところ。後ろに、石川先生いらっしゃいますけども、石川先生は確か学生さんを連れてきてくださっていたと思うんですが、ここは、あの、暗渠になったところにもう1回水を造ってですね、で、そこにその自然を呼び戻そうと。それから、**Very Important Tree (VIT)** ですね。とても大切な木を、**VIT 構想** というのは造って、やっぱり鳥に来てもらうためにはやっぱりその木を守ってかなきゃいけないし、雑草もなきゃいけないし、水辺もなきゃいけないっていうそういう発想から自分たちで環境をデザインするんですね。

そのときに、きっかけになったことがあります。その **VIT 構想**。very important tree という構想ができた背景には、1980 年代に三軒茶屋の三世代遊びを研究する会というのがありまして、三世代の遊びの研究をする会はどういうことをやっていたかということ、まさに三世代ですから、三世代の目線で街を見るという研究をしたんですね。そのときに、もともとここには大きな木があって、昔、じいちゃんたちはここでいっぱい木登りしたんだっていう話をするわけです。そのときに、小さな孫世代の子どもから「ずるい」という言葉が出ました。なぜ、ずるい。言われたほうはびっくりするわけですね。なぜ、ここに木がないんだ。おじいちゃんたちは木登りしたんでしょ。何で僕たちが木登りする木がここがないんだ。それを言われたおじいちゃん世代ははっとするわけですね。これは大変なことをしてしまったと。この木は残すべきだったんだということから、じゃあ、この地域において木というものがどういう意味を持っているのか。これは、大きな木をどうやったら残していったらいいのかということで、**VIT 構想** ということを出して世田谷区に対して意見具申をしているわけですね。提案をしていって、その構想が取り上げられていく。

その **VIT** は、人間の木登りだけでなく結果として鳥を呼ぶということにもなっていく。もしかしたら、後でお話があります朝田さんのハチミツにもつながっていくんじゃないかなというふうに思います。

そしてもう1つ、緑の回廊計画。これは、東京都もやっていますが、その当時からやっぱり緑の回廊計画。これ、コアゾーンを作っているところもそうなんですね。もう、その回廊

を作っていく。そういう発想をそういう団体の人たちが持っていたということですね。

やっぱり都市の環境を考えたときに、面で一遍に変えていくっていうのは非常に難しいと思うんです。今、点であるものをどう線にしていくのか。これを大野秀敏さんだっと思いますが、実は私たち 2007 年、2050 年から環境をデザインするという、こういう本を出しているんですが、その中でファイバーシティという言い方をしています。つまり布ですね。縦糸と横でこう布を作っていく。それから私たちのその緑の回廊もそうですし、そのミツバチさんたちが来るところもそうなんです、そういったものをこう、線でつながりながら布のような自然との共生する都市、街をつくり直していく。ていうかもっと言うと織り直していくということがこれから大事になってくるんじゃないか。その織り直すときに、縦糸に何がくるのか、横糸に何が来るのか。そして、私たち一人一人は何をするのか。おいしいものを食べたかったら、お取り寄せじゃなくて自分で作るというところからスタートしませんかという話ですね。

私は、実は立教大学に畑を作りたいんです。作りたいんです。北山先生、どこか場所ありますか。聞いたんです。一番最初に東横学園女子短期大学というところに勤めたんですが、そこに勤めたときに真っ先にやったのが実は畑を作ったことです。あの、中庭がちょうどあったんで、ちょっと畑を作らしてください。私、生活だったんで、あの、実はいろんな、実習もしていたので、調理実習のところから出てくる生ごみを集めて堆肥化して、そこにいろいろ作っていったんですね。

そしたら、学生たちが喜んで、ご飯のときにそのキュウリを食べたりとか。あるいはもっと言うと、小学校、中学の先生たちが取りに来てるよっていうふうに言っていて、すごく、うれしい思いがあったんですが。やっぱり自分たちの身近な範囲のところではできることをしていくことによって、何か変わっていくんじゃないか。

やっぱり、池袋のオアシスといわれている、立教のキャンパスの中に何か畑ができると、あるいはもしかしたらそこに、養蜂をしていったら面白いんじゃないかなっていう、そういう気がいたします。

後でその本物体験のグリーンツーリズムの話も出てまいります。都市の中でもエコツーリズムやグリーンツーリズムができるはずなんですね。グリーンツーリズムというやっぱりどうしても昨日、私もちょっと佐賀のほうに行ってたんですけども、農村って感じになってしまいますけど、もしかしたら都市の中でもいろんなことができるんじゃないかなというふうに思います。ですからそれを都市から自然をというよりも、自然から都市を見たときにどうなのか。違う視点から見ていったときにどうなるか。そうするといろんな縦糸と横糸があって、それがいい感じの織物になっていくのではないかなというふうに思います。

これからお話しいただく方たちはそれぞれの活動をなさっていて、それぞれの視点から、都市と自然の関係性みたいなことをお話しいただくわけでございますけども、私自身も後ほどまた、皆さんのお話を聞く中でパネルディスカッションの中で質問、感想等を述べさ

せていただきたいというふうに思います。

ちょっと時間が押したかもしれませんが、取りあえずの口火として終わりたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

村田：萩原さん、ありがとうございます。続きまして、村上さん。

2.2 村上 雅巳氏（跡見学園女子大学 准教授）

グリーン・ツーリズム—本物体験のすすめ

村上：皆さん、こんにちは。あらためまして、跡見学園女子大学の観光マネジメント学科の村上でございます。

私は、グリーン・ツーリズムについて話せというご指示をいただきまして、持ち時間が15分しかありませんので、一番身近な例というかですね、事例を皆さんに、示しながらお話ししたほうが一番理解していただけるのではないかなと思ひまして、こういう資料を用意しました。

特にそれ以外の資料は用意しておりませんが、この画面の説明に入る前に、若干グリーン・ツーリズムのこれまでの流れをちょっと触れさせていただきます。

グリーン・ツーリズムとは、農林水産省とか、私が3月末までいました観光庁などでは、農山漁村地域において、自然・文化、あるいは人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動であるというような定義をしております。それで、ヨーロッパでは、農村で滞在してバカンスを楽しむというような余暇の過ごし方が完全に定着しておりまして、普及しているところであります。

英国では、ルーラル・ツーリズムとか、日本と同じようにグリーン・ツーリズムというふうに呼ばれておりまして、フランスではツーリズム・ベール、いわゆる、緑の旅行というような呼ばれ方もしているわけでございます。いずれにいたしましても、農村や漁村などのいわゆる日本で田舎と言われているような地域での自然とかその地域の文化、あるいは人々との交流を中心にした余暇活動というような定義が行われているところであります。

もともと、1960年代に農村を舞台とする観光というのが、ヨーロッパなどでは幕をあげまして、日本ではグリーン・ツーリズムというふうに呼ばれておりまして、1990年代に本格的に始まりました。

それで、日本でのグリーン・ツーリズムというのは、国策として推進してきた面がありまして、農林水産省が中心に行ってきたわけですが、農山漁村と都市住民との交流の推進と、農山漁村の地域振興の一環というような位置付けで行われてきたわけでもあります。

1980年代後半、国土交通省が進めました総合保養地域整備法いわゆるリゾート法というのがありまして、その辺が、あの、バブルの崩壊でリゾート構想が破たんしてしまったと

というような時期がありましたけれど、その後ぐらいからですね、農水省のほうを中心に、グリーン・ツーリズムの振興に着手するという事で全国に 50 カ所ぐらいモデル地域を選びまして、本格的に都市住民が農山漁村で滞在型の観光が楽しめるような、基盤整備を行ったというようなことであります。

国策として推進してきたグリーン・ツーリズムですので、その後、多様な展開を見せているところではありますけれども、最も一般的なものとしまして、観光の面では、非常に人気がある農山漁村などでの農家民泊という、普通のホテルとか旅館ではなくて民泊をするというような旅行が非常に増えてきたということでもあります。

それで、最近、耳にされたこともあるのではないかと思いますけれども、総務省と、農林水産省と、文部科学省が共同でいろいろな企画や予算措置をやっておりまして、なぜここに観光庁が入ってないのがちょっと不思議なところなのですが、実際、旅行会社とかも絡んでおりますので、いずれにしても政府をあげて、子ども向けの体験学習ということで、子ども農山漁村交流プロジェクトというのが近年スタートしております。全国の小学生を、3日程度から1週間程度、農村・漁村で滞在型の体験学習を行わせるというようなことが、近年、スタートしておりまして、また、一時期よりは、この体験型学習というか、いわゆるグリーン・ツーリズムが、また、脚光を浴びてきているという状況であります。

それで、既にそれぞれの地域で体験型の観光振興に取り組む組織が作っている全国的なネットワークがありまして、「全国ほんもの体験推進協議会」というのですが、現在23団体が加盟しておりまして、毎年、持ち回りで「全国ほんもの体験フォーラム」というようなものが行われているわけでありまして、年々、そういうものに参画したいという地域が非常に増えてきているというような状況であります。

最後に、都市住民に、今、観光庁が、今まであまりストレートに観光資源とは言えなかったようなものを中心にしてニューツーリズムというような、1つのカテゴリーというかそういう分野を立ち上げているわけですが、その中でも、非常にグリーン・ツーリズムというのは注目を浴びておりまして、都市住民の方にもニューツーリズムとして受け入れられてきているところでありまして、一方では、グリーン・ツーリズムは農村振興の一環としての一面もあるということで、期待が非常に大きいということでもあります。それから、今、萩原先生のお話にもありましたように日本人のライフスタイルの変化に呼応して、さらにグリーン・ツーリズムも発展していく可能性があるのではないかというような、今、状況に來ているところでございます。

それでは、この画面にあります「越後田舎体験」という事例を挙げながら、グリーン・ツーリズムについてお話したいと思います。

それで、私がここに呼ばれた理由というのは、ご紹介にもありましたように私は、ずっと国土交通省から観光庁にいましたが、グリーン・ツーリズムの専門家というわけではありませが、観光全般をずっとやっておりまして、本省だけではなく、結構、地方に出向とい

う形で四国に行ったり、新潟のほうに行ったりしております、観光庁ができる前後に、先ほどご紹介にもありましたように新潟県の上越市というところに4年間出向しております、そこで、地域の観光振興を任されたわけではありますが、地域のグリーン・ツーリズムの振興にもかなり携わってきた経験があったからだと思います。

それで、ご存知の方もいらっしゃるかなと思いますが、新潟県上越市というのは、春日山城跡というのがあります、ここ最近、私がちょうど赴任した直後ぐらいに、大河ドラマの『風林火山』が先ず決まりまして、ロックミュージシャンの Gackt さんが上杉謙信の役を演じて話題になった『風林火山』の放映があります、その後1年を置いてすぐ、あの例の直江兼続の大河ドラマ『天地人』の舞台になりまして、観光的にはそういう神風が吹いてしまったので、もっとじっくりやりたかった面もあるのですが、大河ドラマ対策というか大河ドラマを活用した観光振興への取組み、当然これもまた地域の観光振興にとっては凄いことなので、これにも一生懸命取り組んだわけですが、いわゆる大河ドラマ効果というのは、世間一般に言われるように、突風みたいに1年間吹き荒れて、一過性みたいなところがあるのですが、それ以外にこの地域に何かあるかを考えたときに、この「越後田舎体験」というのが、上越市とそれから隣の十日町市にございまして、これはやはり持続可能な地域づくりの一番のツールでございまして、自然がある限りこの越後体験事業というのは永久にあるわけです。極論すれば、そこに自然とそれを織りなす人がいれば、未来永劫できるわけがありますので、これにも非常に力を入れてまいりました。

そういうわけで先ほど上越市で観光局長やっていたとの紹介がありましたが、越後田舎体験推進協議会というのがあります、その会長も務めておりまして、まさに首都圏とか横浜とかの小中学校にこの「越後田舎体験」を売り込むためのセールスに歩いたというような経験もございまして。

《パワーポイントの資料を見せながら》これについて少しご説明します。エリアとしては、上越市と十日町市ということで、上越市は平成17年1月に当時の平成の大合併では最多の市町村になる14町村が合併をいたしまして非常に広大なエリアになりました。東京都の23区より広いエリアになったわけでございます。その隣の十日町も合併をしましてかなり大きなエリアになりました。

それで、合併した効果といたしましては、最初始めたころは当然山間部が中心だったわけですが、合併をしたということで、海に面している地域も上越市ということになりましたので、その体験メニューの中に海の体験のメニューが途中から加わったということで非常に幅広いメニュー、それまでもかなり豊富な体験メニューがあったのですが、合併をしたということでその海に関するメニューが加わって確実に100以上のメニューになりました。

それで、平成10年から始まったのですが、私が出向した平成17年から20年ぐらいに、ここにありますが、体験型観光の分野ではかなり認知されている「オーライ！にっ

ぼん大賞」の受賞とかですね、それから先ほど言いました、平成 20 年には子ども農山漁村交流プロジェクトの受入モデル地域の先導型に指定されました。この先導型というのは、各地域がこの体験型観光をやりたいと言ったときに、それを指導する地域ということで単に受け入れるだけではなく、そういう地域についても、ご指導しますというようなところでございます。

それで、平成 20 年に 10 周年を迎えまして、20 年の秋にはエコ・ツーリズム大賞の優秀賞をいただいたということで、前提といたしまして、日本のほんもの体験の分野ではかなり、評価も高い先進地域であるということをご理解いただいて、この映像なりを見ていただければと思います。

それで、ここが一番評価されているところは、図の真ん中に越後田舎体験推進協会というのがありますけれど、この協会の会長を出向していた 3 年間ぐらいやらせていただいて、一生懸命この組織づくりと売り込みを図ったわけでございますけれども、この一番の売りは、受け入れの手配から、連絡とかいろいろな調整とか、さまざまなものがあるのですけれども、それから最終的には全部終わった後に精算ということになるのですが、それらをすべて一括して協会事務局が行うというところです。だから利用される学校とか団体がいちいち宿泊場所にいくらか体験活動ごとにくら支払いをするとかの必要がなく、この協会事務局にワンストップサービスで全てをやってもらえるということが、旅行エージェントなどから非常に高く評価されているところであります。

それからもう 1 つ、それぞれの体験活動には必ずインストラクターがいるのですけれども、後でまとめのところにも出てきますが、これが本当に地元のおじいちゃん、おばあちゃんがやっているわけでありまして、技術については全く問題ないのですが、人への教え方とかがなかなか慣れていない人もいるのですが、それを補うために 1 年のうちに何回も研修を行っておりまして、とにかくこの体験型観光の命というのはこのインストラクターの質の高さでありまして、これがいかに保てるかというのが一番の課題だと思うのですけれども、この越後田舎体験はここに非常に力を入れてまいりました。このインストラクターの質の高さと熱意に関しても高い評価をいただいております。

これが設立以来の数字なのですが、最初は 1,000 人ぐらいだったのですが、近年は、大体、平均して 5,000 人が 1 万泊、泊まるようになっております。それで最近の傾向といたしまして、今でも小中学校が中心なのでございますが、最近、その他の団体が増えてきているということで、学校とかには関係ない、いわゆるシニアクラスとか、大人のグループやファミリーみたいなものもこういうところに参加をいただいているというところがあります。

それでこれが先ほど言いました特徴でございますが、このあたりですね、長い海岸線というふう書いてありますので、海のほうのメニューと、それから中山間部の両方のメニューが、1 度に、例えば 2 泊 3 日で来られましたら 1 日目に海岸で地引網をやったり、後で写真が出てきますけれども、2 日目には、まさに田舎体験の定番メニューである農業体験

などもできるということでもあります。

2番目が先ほど言いました、インストラクターの質ですね。それから3番目がこの企画コーディネーターの能力でありまして、即ち、手配、連絡、調整、精算、全てを事務局で一括してやりますということでもあります。

最後に、何よりもその地域の人が首都圏などの子どもたちを迎え入れるために、地域の利害を越えて、一丸となって受け入れしているということが評価されているところでございます。

そして、テーマとしては「つなぐ」というところでありまして、自然と自然、それから自然と人とのつながり、それから人と人とのつながりをつくるということです。それぞれのつながりを持って、生きているということと生かされているということ、来た子どもたちに伝えたいというようなテーマでやっております。

それから田舎の風景と人のぬくもりがここにあります。これを全面に出してPRしているところでもあります。これは一番ポピュラーなのですけれども田植え体験の様子です。これは自然観察ハイキングですね。新潟県ですので当然、冬は雪が降りますが、雪の上を歩くというようなスノーシューも結構人気がありまして、広報宣伝に力を入れています。それから食体験ですね。押し寿司とか笹寿司ですね。それからこちらが、海のメニューがあるということで、魚のさばき方です。漁師さんと一緒に魚のさばき方を体験してもらいます。今の子どもたちは、包丁を持ったことがないというような子もいるので、こういうことも体験活動として行います。

次は、田舎料理ですね、全部。そば打ちなどもやります。それから、春に田植えをした子どもたちが今度は秋に来て稲刈り体験をしてもらうということもします。要するにお米はどうしてできるのかということを実感してもらうというような体験です。それから伝統工芸体験です。これはどの地域でも必ず伝統的な、あるいは工芸的な体験メニューがあるのですけれども、ここではわら草履作りとか、それから、和紙作りですね。それから太鼓体験やそれからアケビのつるなどで作ったつる細工工作とってこれで籠などを作ります。

特徴ある地域のさまざまな体験ということで、先ほど言いましたように、海も近いので、地引網などができること。それから、当然、関東では絶対味わえない雪の体験ですね。冬に来てもらうと雪の体験ができること。これは、灯籠づくりをしているところでもあります。この中に全部、ろうそくを1本ずつ立てて、キャンドルロードと言われるような夜のイベントを行う準備をしているところです。

それからもう1つ一番大きな特徴は、農村生活体験ということで、先ほども言いましたように民泊ができるということです。今、450軒の受入農家がありまして、1度に1,000名の民泊を受け入れられるということです。この1泊2日なのですけれども、ここで、農家をやってお宅に3～4名ずつ分かれて泊まりまして農業体験やったり、食事の準備と一緒にしたり、それから夜はおじいちゃん、おばあちゃんから昔話を聞かせてもらったりということで、まさに触れ合い農村生活体験を一晩かけて経験するわけでもあります。本当

にたった一晚ですけれども、帰るときにはもう離れ難いというか、みんな、中学生あたりが本当に涙、涙で別れていくというような光景がいつも見られます。

これは、例えばその民泊体験ということで、「私のグループは岩野さんのお宅に泊めていただきました」ということで、岩野さんというお宅で、常に通常食べている夕食のメニューを絵に描いたものですね。また、竹の葉の天ぷらとかですね、菜の花のお浸しとかですね、別にお客さんではないので、何かごちそうを作るというわけではなくて、その家がいつも普通に食べているものを一緒に作って一緒に食べるわけです。そういう田舎の日常を体験してもらおうというものであります。

最後に、「田舎の娘になりました」と書いてあるように、これはみんな都会の子どもたちですが1泊2日あるいは2泊3日の短期間で地元の人になりきってしまうことができるぐらい濃密な体験だということでもあります。これはちょっと宣伝のし過ぎですが・・・。

ということで、まとめますけれども、3年から4年ぐらい、こういう越後田舎体験というものに私も携わらせていただきまして、いずれにしても、いろいろな地域には必ず自然・文化、それから人がいますので、こういうものを活かしながら、そういう地域では地域の活性化に結び付けておりますし、今日のテーマである「自然と共生、都市から自然を考える」ということであれば、やはりこういうところにわれわれが今見失ってしまっているものがあるのではないかなというところがあります。とにかく、子どもたちを受け入れる地域のお年寄りが非常に元気になっていることで、この10年間何がよかったかという、地域の、お年寄りが元気になって、毎年子どもたちを迎えるのに楽しみに待っているというような状況になっているということです。

それから、ここに来てくれた子どもたちはとにかく、心の豊かさ、そういうものも学んで帰ってくれるというようなことでありますので、このグリーン・ツーリズムという分野は、いろいろなところで、こういうことをしたいというような地域も増えてきていますけれども、これから日本人のライフスタイルが変わってくれば、何もディズニーランドばかりに行って夢の世界を楽しむだけでなく、1年間のうちに何日かはこういうところ（いわゆる自然豊かな田舎）に行って、心の観光をしたほうがいいのではないかなと思っているところでもあります。

ちょっと宣伝になってしまいますが、ぜひこの越後田舎体験、今日のお話で多少なりとも、もしご関心を持っていただければ、小中学生だけではなく大人が体験できるメニューも今はたくさん用意しておりますので、ぜひ来年の春とか夏、或いは先ほど言いましたけど冬も雪体験ができますので、ちょっとお出掛けいただければ、来てよかったなと必ず思ってもらえると確信しております。そういう意味で、我々が最近見失ってしまっていたものを必ず再発見できるのではないかなというように思っております。

グリーン・ツーリズムということでお話をさせていただきましたけれども、こういうものが今後の観光においても非常に大きな地位を占めていくのではないかなと思いますし、これからの地域の観光振興の中では、このあたりにも力を入れていったほうがいいのではない

いかなというように思っているところであります。

以上でございます。ありがとうございます。(拍手)

村田：村上さん、ありがとうございます。では、和田さん、お願いいたします。

2.3 和田 慎一氏（東京都環境局 自然環境部 緑環境課課長）

東京都における緑の保全 ～保全地域と東京グリーンシップ・アクション～

和田：あらためまして、皆さんこんにちは。東京都環境局の和田と申します。

私は、行政の立場から、自然の保護と回復を図るという取り組みをしてるんですけども、私の仕事を大きく分けると、1つは、緑を新しく作り出すということで、屋上緑化とか、壁面緑化というような仕事ですとか、あと、校庭の芝生化という事業を東京都でやっておりまして、そういう緑を新しく作り出すということと併せて、今ある都市に残っている緑を保全していくという取り組みをしております。

本日、声を掛けさせていただいて参加してお話をするのは、その中で、都市の中に残っている緑を、企業とNPOと行政とが連携することで、それを守っていくという取り組み、東京グリーンシップ・アクションという取り組みがあるんですが、そのことを中心にお話をさせていただければというふうに思っております。

ただ、その前段として、東京の緑の現状ですとか、それから保全地域という東京都の条例で、緑を守っていく地域を定めているものがあるんですが、そういったことも含めて、お話をさせていただければというふうに思います。

まず、東京の緑の現状ですけども、大まかに、こちらに写真に載せておりますように、都市の中でいろいろこういう街路樹の緑ですとか、公園の緑とかですね、それから、一番右の隅のところは、こちらは、屋敷林ということで、武蔵野の面影が残るような屋敷林というのも、残っているというところですけども、あと、こちらはその里山ということで雑木林があって田んぼがあってというようなところも、多摩地域のほうにはこういったものも残っているというところがあります。

さらに、多摩地域の奥のほうになりますけれども、奥多摩とかですね、桧原村というところも都下にはございまして、ここには、まあこういった山林というのが残されているというようなところがございます。

今日、写真等ありませんけどさらに言いますと、東京には島がありまして、伊豆七島とか、あと小笠原ということで、小笠原は、来年の世界遺産登録目指しているいろいろやっているんですが、東京と一口に言っても、いろんな緑があるというところがございます。

緑といっても、数字的な部分でどうなってるかというところなんですけど、データが古い

んですけれども、平成 15 年のものなんです、都内のみどり率というものの数値でございまして、一般的には緑被率というようなものが使われていますけれども、東京では、緑被率に加えてですね、河川とか、水源みたいなものも含めて、樹林地とかそういったものの割合というものを定めています、区部だと 24%、それから多摩だと 72%という数字になっています。毎年調べているわけではないんですが、この 5 年前の平成 10 年の数字で言いますと、区部が 29%、多摩のほうが 80%という形になっていますので、やっぱりデータ的にはですね、年々その緑の割合というのが減っているという傾向ではございます。特に多摩地域は緑の割合としては大きいというところと言えます。

緑の現状ですけれども、荒れる緑ということでして、1つは先ほど写真で見ていただきました奥多摩の森林ということですね。林業が低迷してしまっていて、木材価格の低下とかですね、後継者不足という部分で森が荒れている状況がございます。それから、谷戸の田んぼとか畑についてはですね、農業する方がいなくなってしまっていてですね、耕作放棄地の増加というような部分が課題としてはあると。それから、もっと都市に近い雑木林の部分なども残土の埋立とかそういった部分で失われてきてしまっているという現状がございます。

これに対して、東京都として何をしているのかというところなんです、1つは保全地域という、この制度がございます。これは、1974 年から始まったものなんですけれども、東京都の条例で保全地域という緑を守っていく地域を指定する形になっています。1つは、森林とか里山とか雑木林とかいろんなものがあるんですけれども、そこの中の指定をしたところのですね、貴重な緑の保護とか回復を図りつつ、その場所で自然と触れあいということで、住民の方とか子どもたちとかがそこで活動できるような取組みというものを行っています。

現在ですね、都内に 47 の保全地域というものが指定されておまして、いろいろその種類がいろいろあるんですけども、主に多摩地域にあります。区部は本当に一部しかないんですけども、多摩地域の中で 47 カ所そういう保全地域というものが、定められていて、取組みが行われているというところがあります。

この保全地域を使った保全の取組みということでグリーンシップ・アクションという取組みがあります。今日はここを中心にお話をさせていただくんですが、その緑を守っていく行政の立場からですね、緑を守っていくという部分で、行政だけではなかなか財政的にも人間的にもいろいろまかないきれないというところがありますので、いろいろな方々と連携をしていくというところがあるんですけれども、その 1 つのキーワードとしてキーマンの発掘・連携というところがありまして、今日ちょっとお話しさせていただきますのは 1 つの企業という部分ですが、東京には、いろいろな企業が本社とかいろいろな形であると。そのパワーを環境の保全のほうに使っていけないかというところで、企業のほうからですね、具体的に、労務提供とか社員の方に参加していただいととか、まあ資金的にも支援をしてもらおうと。それをするによって企業としてまあそういう、CSR 活動と

いいますか、企業のイメージの向上も図れるというようなところがあります。

それから NPO。都内にも先ほど萩原さんのほうからもいろいろお話がございましたけれども、地域でいろいろ活動されてる団体。NPO とかいろいろございますけれども、そこもいろいろ知恵とかこうしたほうがいいという提言なども持つてるわけですけれども、実際に活動する場所も実は結構求めているというところがありますので、そういった部分の力を借りていくと。

それから、もともと農業とか林業とか、仕事でやってるところがあるわけですけれども、そういう人たちに、先ほども申し上げましたけども、森林がかなり荒れたという状況があって、ノウハウはもともと持つてるんですけどもそれを生かす場がなかったりとか、いろんなことがあって、そういう部分をうまく連携させていくような取組みが考えられないかなということ、その具体的な取組みとして、グリーンシップ・アクションという取組みがございます。

具体的には、企業と NPO 法人、東京都の 3 者が、それぞれ協定を結ぶような形で緑を保全するというような取組みを行っております。企業は、先ほども申し上げましたけれども、資金の提供ということである程度まとまった費用を負担していただきまして、それから、企業の社員の方にボランティア活動に参加をしていただくというような形になっています。それを受けまして NPO 法人のほうは、保全活動の運営をする。それから場合によっては、社員ではなくて一般の都民の方にご参加をいただくような場合ですね、そのボランティア活動の募集というようなことも行っております。

東京都のほうは何をするかということ、活動場所の提供ということで、前段のほうで申し上げました、保全地域という場所を提供するような形ですとか、実際の保全活動のための道具類を手配するというような形の役割を担ってそれぞれが役割を果たすことでこの仕組みが回るような形になっています。

具体的な取組みの例ですけれども、こちらに紹介するのは、青梅市にあります上成木という地域に、本当にここは森になってるようなところですけども、荒廃してしまった森を保全をするという取組みがございまして、そこで、写真に載っているようなですね間伐作業ということで、間引きを行うような取組みを行ったりとか、あと親子向け森林体験ということで、森の中でその体験を子どもたちも行ったりとか、併せて自然観察を行うというようなプログラムを実際に今度は現場で体験するというようなことを行っております。

それから、野火止用水歴史環境保全地域ということで、これが第 1 号になった保全地域ですけれども、武蔵野の面影が残るような雑木林の間を用水が流れているんですが、こちらにもその雑木林のほうで下草刈りとかそういった活動を行うというようなことも行っております。

それからその下のほうはですね、図師小野路歴史環境保全地域ということで、これは町田市にある歴史環境保全地域になっておりますが、いわゆる里山が残っているところですが、ここで荒廃した水田を復元しまして、田植えとか稲刈りとかそういう農業体験を行う

ような取組みを行っております。ちょうどこれが昨日実は私もここに行ってきたんですけども、1年間、4月～12月まで月1回ですね、そういう取組みを継続的に行っていました、昨日はちょうど、刈り取った稲を使ってもちつきをやってきましたんですけども、最終的にはそういうお楽しみというかですね、保全活動に伴って出てくるそういうものを使って楽しむようなプログラムも併せて行っていると。あと、夏なんかにはちょうどホテルなんかもいるんで、子どもたち向けにホテルの観察会とかですね、そういったことも併せて行っているという取組みです。

実際、どの程度やっているかというところですが、この事業自体はですね、2003年度から取組み始めたものでして、当初は、1つの保全地域の中で参加する企業は1つだけだったんですけども、昨年度の実績としては、47全部で保全地域あるんですが、そのうち10カ所の保全地域で大体29社の企業さんに参加していただいて、こういう取組みがいろいろ行われているという形になっています。

具体的に、そのグリーンシップ・アクションの課題というところなんですけれども、いろいろその課題という部分ではあるんですが、大きくちょっと今日ご説明するのは2つに分けております。

1つは広範な企業の参加ということで、今29の企業に参加していただいているという話をさせていただいたんですけども、まあなかなか実際的には大企業中心というのでしょうか。やっぱりある程度先ほど企業の役割として費用の負担というものがありますので、中規模な企業とか小規模なところというところがなかなか入りにくいというのが現状でして、広がりという意味では、課題があるところが1つ現実としてはございます。

それからもう1つは、継続的な保全活動の実施ということで、どうしても、ある意味単発的な保全活動というのが中心になっているところがあります。1年間実際にその企業に参加していただくとしても、年に1回とか2回とかってというような形で、なかなか年間を通じてある活動に参加していただくとかですね、そういった部分がやりにくいところがございます。先ほど、町田市の水田の体験のほうをお話ししましたけれども、ここは年間を通して活動しているところもあるんですが、なかなかそこまでいかないというところがあるので、どうやったらそういう継続的な形に参加していただけるかなと仕組みを東京都としても考えていきたいと思っております。

この仕組み自体ですね、始めて8年ぐらいたってるところですけども、いろいろ課題を抱えながらの仕組みとしてはなっていると。率直に言ってですね、東京都のほうで費用的な負担というんでしょうか、行政も非常に厳しい部分があるんですけども、この仕組み自体は実はあまり費用が掛かからないという仕組みでして、実際、私たちの人件費とか事務的な費用というのはもちろん掛かるんですが、企業の方にそういう費用的な負担をしてもらいつつ、また、先ほどのNPOも、そのお金を使って自分たちの本来的な活動も回っていくような仕組みというような形になっているので、その三者が連携するという意味でも、お互いにそのメリットというんでしょうか。そういったものを考えながら仕組み

として回るような仕組みに今なっているという形になっています。

ちょっと掛け足で雑ばくな話になりましたけれども、東京都のほうで行っているグリーンシップ・アクションという取組みについてお話をさせていただきました。どうもありがとうございました。(拍手)

村田：和田さん、ありがとうございます。朝田さん、お願いいたします。

2.4 朝田 くに子氏 (株式会社風土倶楽部 代表取締役)

ミツバチの視点から見えてくる風景

朝田：朝田です。よろしく申し上げます。

私は、ミツバチにかかわり始めてもうかれこれ6年ぐらいなるんですけど、ミツバチというと、皆さん、2つまず思い浮かべると思うんです。1つは、刺す昆虫。必ず刺すでしょって言われる。もう1つは、蜂蜜を取る。多分、この2つだと思うんですね。

私が最初にミツバチとかかわったのは、実は食育のほうからなんですけれど、地域づくりをサポートしているときに、一緒に地元の人たちと調査したりしてたことがありまして、その中で蜂蜜というのは、風土をうまく味わえる、面白い食品だということで、取組み始めたのがきっかけなんですけれど、それで、先ほどご紹介にありましたように2005年の8月に東京はちみつクラブというのを立ち上げました。

このときは私の中で、まだ、先ほどの2つの後者の蜂蜜しか頭になかったんですね。そのときから2～3年そういうことを中心に活動してたんですけど、蜂蜜から入ったときに見えてこないことがたくさんあって、この2～3年は別の角度からミツバチと付き合ってみまして、そうすると、いろいろなことが、今まで本当に何も知らなかったなというようなことが出てきています。

蜂蜜と言えば、東北のほうではクマと人とのバトルになるんですね。先ほど、萩原先生がカラスと浮浪者のバトルというのがあるとおっしゃっていましたが、東北ではクマと人のバトルがあって、結局どっちが勝つかっていったら半々ぐらいなんですけれど。都会で今、ミツバチがすごくブームになっていますけれど、そうなると、どっちかというともう全然、ミツバチの天敵であるクマがいないので人間の一人占めということになって、ますます、ますます、ミツバチは蜂蜜ということが今固定化してきてるかなと思います。今日はその辺のことを、皆さんに、もうちょっと違う角度から見ていただければいいなと思ってお話ししたいと思います。

ミツバチのこと、どのくらい知っていますかですね。まず1つ、今日ぜひ1つ覚えて帰っていただきたいのは、ミツバチは花粉で増えるということなんです。花粉というところが視点の中でスポンと抜けるんですね。人間はとても欲深い動物なので、蜂蜜を取ってく

れるというところだけに注目しがちなんですけれど、実を言うと、ミツバチは花粉で増える。蜂蜜で働くんです。ここに出てます花粉ダンゴというものを必ず足にくっつけて、これで、巣箱のほうへ持って帰ります。

この蜂蜜は私たちと全く同じで糖質なのでエネルギーになるんですね。だからこの蜂蜜を食べないと活動できない。だから食べて動くということです。じゃあ、花粉をあんなんにも何に使っているのかというと、これはたんぱく源なので、皆さんもよく聞いたことがあると思いますけれどロイヤルゼリーですね。これと蜂乳。ほぼ同じ成分なんですけれど、女王蜂が1日の1,000個以上卵を産みます。そのパワーはロイヤルゼリーによって得ているんです。生まれた卵が幼虫にかえってそのときに、蜂乳といって蜂の乳と書きますけれど、これを、働きバチが幼虫に与えてそれが成長するというので、これでミツバチがどんどん増えることができるんです。大体、1匹のミツバチの寿命は40日弱ぐらいなんですね。ですから、すごい勢いで新陳代謝を繰り返しているの、増えないと、巣を維持できない。

ところがですね、巣を見たことがあると思うんですけど、ハチミツを貯蔵する場、それから卵を産んで幼虫を育てる場、そして最後にこの花粉を貯蔵しておく場という3つが必要なんですけれど、最初の2つでかなりの場を占めちゃうんですよ。だから花粉をたっぷり貯蔵しておく場所がないために、ミツバチはせっせ、せっせと毎日花粉を取らないといけない。

どのぐらい働いているかというのがこの下のところにあるんですけど、1回の往復で運搬する量は花粉団子が大体両足に10~20ミリ。これは人間で言うと一番おきなスイカを、両手に抱えてるというふうに考えてくださっていいと思います。それで、花蜜をおなかにつぶす。特攻隊と同じで行くときは行きエネルギーだけおなかの中に入れてって、帰りはそれを満タンにして帰ってくるんですね。それで合計が大体80ミリグラム。体重が90だからほぼ自分の体の体重と同じものを持って帰ってくるということ。これを何と1日に10往復ぐらいします。

こうやって、ミツバチの生態をしっかりと押さえた上で彼女たちの行動を見てみると、どういう状況が、ミツバチにとって快適なのかということがおのずと見えてくるんですね。

これはですね、私たちが、去年からちょっとやっているんですけど、実は私たち、玉川大学ミツバチ科学研究センターの中村純教授ともうずっと長いこと活動を一緒にしています。私たちは、ハチを飼っていないんですよ。だけど、これだけはちょっと実験用で持ってきて、こういう形で花粉ダンゴを取ったりしているんですけど、花粉ダンゴというのは、あの一番上に穴がこう開いてますけれど、あれを巣箱のところに付けるんですね。そうすると、せっかく持ってきた花粉団子が通るときにぼろっとこういう形で落ちます。毎日やるわけじゃなくて1週間に1回か2回なんですけれど、こうやって集めたものを、どこの花から持ってきてるか特定するためにやるんですね。

これが、国分寺が活動の場なんですけれど、採取された花粉で、これ去年のものなんで

すけど、例えば7月のこの1週間を見ただけでも、こんなに劇的に変化するんです。何で花粉から見るかという、蜂蜜だと何となくこうなめたときに、これは何の花とか、これは何とかが多いわねぐらいにしか分からないんですけど花粉だとちゃんと同定できるんですよ。花が。それで、こういう形で花粉を調べています。

今日 PDF で持ってきちゃったみたいなので、パワーポイントではちゃんとなっていたんですけど、見えなくなっちゃってるんですけど、ミツバチにとって非常にづらい環境というのが、これが花粉の収量だとして、こっちが植物の収量だとすると、この辺にこういうふうになる場合がすごく多くて、利用できる植物も少ないし花粉もあまり取れないと。これがだんだんこういうふうにどんどん、どんどんきれいな三角形になればなるほど、ミツバチにとっては利用できる植物がたくさんあるし、花粉もいっぱい取れるという状態になるわけですね。

もう1つ忘れてはならないのが、この一番端っこにある時間軸なんですよ。年間を通して得ることができるかどうか。瞬間的にばって花が咲いて終わってしまえば、移動養蜂の場合はそれでオーケーですけど、そこにずっと巣箱が置かれている場合はこれが一番重要なものになってきます。だから、一番ミツバチにとって幸せなのは、この三角形がきれいであるのと一緒に、こうずーっとあるということなんですね。それがミツバチの視点での環境評価になるということです。

ここに、ここにちょっとここにミツバチがいる予定だったんですけど、もちろんできるだけ近くにねと。さっき言ったみたいに、1日に10往復、自分の体重と同じだけのものを持って帰ってきてますから、できるだけ近くにあることがやっぱり幸せにつながるということなんですね。

ここからなんですけれど、先に、研究学会のほうからお題いただいたときに「都市と里山」ということだったんで、じゃ、皆さん、どのぐらい自分の周りにミツバチが利用できる花があると思ってるかなと思って、こういう形でお花をリストアップしてみました。実はどれもこれも利用できるというわけではありません。

中村先生が、緑の砂漠になってんじゃないのというのはよく言ってらっしゃいます。私たちは、ハニーウォークというのをやってまして、蜜源・花粉源植物を調査しようということで、これちょっとしたエコ・ツーリズムというか、さっきのお話のグリーン・ツーリズムみたいな感じになっているんですけど、これはやはり玉川大学の佐々木先生という教授なんですけれど、つい7月に『蜂からみた花の世界』という本を上梓された方で、その辺のご専門なんですけれど、今年は先生に2回一緒に歩いていただきました。国分寺だけで言えば私たちは、この蜜源ウォークというのを何度も何度もやっています。というのは先ほどもお見せしたように、季節によってどんどん花が移り変わっていくので、何度やっても発見はあるんですね。

これは、国分寺でやったときですね。こっちのこのきれいな色のグラデーションになっているのは、花粉がこんなに色があるよというリストなんですね。ブルーもあったりする

んですけれど、これは、クローバーにミツバチが来てるのをみんなで見てる場所なんですけれど。

例えばどんな花があるかという、今日ちょっと時間がないので一つ一つちょっと言うのはできないのですけれど、あの一番蜜源の花として有名なのは菜の花だとかレンゲだとか、ま、ミカンですね。コスモス、セイタカアワダチソウというのは秋の植物としては非常に蜜も花粉も取れるのでいいです。だけど、セイタカアワダチソウはたっぷり蜜は取れるんですけど、あんまりおいしくはないです。それから、皆さんわりにバラなんか行くと思われるかもしれませんが、バラはここに入り込めないんですね。だから、野ばらみたいにこうぱかっと咲く、こういうバラありますよね。これはオーケーなんですけれど、この手のバラは、ほとんど行けません。それから、この辺1つずつ全部お話したいんですけど、もう菜の花は今、菜種自体が自給率 0.01%と言われてるぐらいで、かつてから比べれば本当に激減しちゃった。3%ぐらいしか、かつての花の量がないぐらいですね。

それから、レンゲも今、だいぶ復活はしてきてますけれど、農業のやり方が変わっちゃったので、もうほとんどない花です。それから、ミカンは、栽培品種ががらっと変わってきて、晩生（おくて）が中心だったのが早生が中心になってきて、晩生であればあるほど蜜がたくさん出るので、早生の中にはほんの少量しか出さないものもある。果実は、種なし何とかというのがありますけれど、種のない分は花粉がありません。出ません。結構みんな人間の都合でどんどん変えてしまってます。それからイチゴは、これも結構、大きな問題なんですけれど、今ごろからちょうど11月ごろから4月ぐらいが、イチゴのハウスの中でやる時期なんですけれど、その間にずっと閉じ込められて、酷使されます。だけど全然ケアしてもらえないのでほぼ全滅してます。その全滅してる数が、多分4万組以上になってそれは、あの、今騒がれてる農薬で死んでる数よりも多いです。それはもう完全に人間の勝手にやっています。

もう1つ、ミツバチの好きな花。これ、街路樹ですね。この中で、時間があつたらみんなどれが好きでどれが嫌いだと思いますかっていうのをやろうと思ったんですけど時間がないので、答えを言っちゃいます。苦手なのはハナミズキです。でもこれ、すごい街路樹で取り入れられています。行かないことはないんですけど、皆さんの周りで、もしハナミズキにミツバチがとまっているのをごらんになったら、それは相当その周辺に花がないからそこに行ってると思ってください。都会の人は花に行ったら、これが好きなのねって思っちゃうかもしれませんが、必ずしも好きで行ってるわけではないというのがあります。好きなのは、ユリノキとかトチ、サルスベリ、もちろんサクラも好きです。ただサクラは、樹齢がかなり年いってくるとほとんど蜜を出さないという噂もあって、きっちりデータで取られてないので何とも言えないんですけど、今、日本全国サクラが確かお年寄りになって、駄目なんじゃないかなと思うんですけど、そういう意味では咲いてるけれど、じゃあ蜜が出てるかというまた別の問題になると思います。

ずーっとこういうふうにならなくて、あの、今お話したこういう大きな変化が、こうあ

って、ミツバチは非常に、まあ今苦労してるんじゃないかと。それで、私たちは蜜源・花粉源植物を増やしましょうという活動をやっています。

これは、新しい風景の創出をめざすみつばち百花プロジェクト。私たちは、風景の創出をやりたいなど。再生ではなくて創出。というのはもう、都市の中ではあまりにも失われてしまっていて、それを再生するというのもう無理なんじゃないかなという気がしてまして、それはもう新しい創出ということにしたほうが。これが国分寺フィールドで私たちがやってることで、先ほどもちょっとミツバチやってますと言ったら、どこでやってるんですかって、多分巣箱をどこに置いてるんですかっていうお話かと思うんですけど、われわれは、その蜜を取ることを主眼にしていらないんですね。これもニホンミツバチ用の巣箱を置いてるだけです。入ってくださいということで待ってます。この黄色いところで、黄色の矢印が出て、あそこにニホンミツバチが自然営巣してるんです。その上のコンクリートに穴が空いてますよね。おっきいほうの穴じゃなくて上のちっちゃいほうの穴にミツバチが自然営巣していて、私たちはここに営巣してるんだから分蜂するときに、そんな目の前に巣箱を置いといたら入ってくれるんじゃないかと、2年やってみましたが、入ってくれません。でも、自然営巣のほうは2年ちゃんといるんですけど。その帽子をかぶってるのは先ほどの、花粉トラップを仕掛けたりしてる、連れてきている西洋ミツバチです。これは、実験用で飼ってます。

こんな形でミツバチが入ってくれるのを待ってる。何で入ってくれるのを待ってるかといったらその地域の自然環境を、私たちが、花をたくさん植えてあげて、いい環境に、先ほどお見せしたあの三角形のきれいな形にしてあげられ、近づければ近づけるほど、ミツバチが増えてこの中に入ってくれるんじゃないかなというようなことで、そういう活動なんですね。

これが、その新しい風景の創出を目指す百花プロジェクトということで、今お話ししたように生息してるミツバチの数を増やす。それを地域みんなを増やして、それが人が暮らしやすい環境づくりに直結というか、まあ、何かの形でつながっていくんじゃないかということですね。都市空間の新しい価値の創出がそれでできればいいなということをやっています。

連携先としては今、岩手の紫波だとか福島県飯舘、ここに書いてあるところの住民の方々と、これの地方版を今一緒にやっています。それはやっぱり、やみくもにミツバチの巣箱を置いて蜂蜜が取れて、ここはいい環境だねなんていうことはやりたくないで、まず今取れてる蜂蜜の分析から始めて、それは花粉から分析したり、実際に歩いたり、地域の人たちの話を集めて、まず蜜源花粉源植物にどんなものがあるのかということをきちっと押さえた上で地域をもう1度、そういう方向からとらえ直してみようというところから始めてます。

国分寺のほうは、すごい場所がありまして、武蔵野の面影が残るところがあって、今年はその50平米の土地を借りまして、これは地主さんのご好意で借りて、そこに、のらば

うですね。4月には、のらぼうってアブラナ科の花ですけど、花を植えたげたらちゃんとニホンミツバチの訪花を確認しました。それからそちらはカボチャを植えました。カボチャというのはものすごい蜜が出るんですね。これが実際にこれもニホンミツバチがちゃんと来ているあれで、ものすごくカボチャの森みたいになっちゃったんですけど、ここで5種類のカボチャを育てて、それでこの取れたカボチャは私たちが10月30日のハロウィーンの日、パーティーをしておいしくいただきました。これですね。こんな感じで、カボチャができました。人が植えてミツバチが受粉して私たちとミツバチのコラボレーションした結果が、結実したということで、蜂蜜にとられない、本来のミツバチが花を受粉させて、そして、また花がそこで再生されるという、本来の循環をすごく意識した活動をしています。

今は、カボチャ終わった後は高嶺ルビーを植えてみました。高嶺ルビーというのはソバの一種で赤いこういう花が咲きます。こちらの、ニホンミツバチの訪花を確認してこういう形で、今、だいぶ実がなって、あと10日ぐらいで収穫できそうです。

こちらは三鷹でやっている「みつばちの庭」です。このぐらいの小さなスペースがあって、ここに何かつまらない花ばかり、花というか何かほとんど放置されてたので、私もつたいないから何か植えたいんだけどって言ったら勝手にやればって言われて、今ここをこういう形で、その勝手にやればには、うちはお金出さないから勝手にやればだったんですけど、こういう形で蜜源の植物を植えています。

それは何でかっていうと、この活動をし始めたらいろんな人に、蜜源・花粉源植物っていうけど一体どんな花があるのって必ず聞かれるので、じゃあ、園芸ショップでも普通に買ってこれたりとか、身近な花で、こういうのがありますよっていうのをこういうふうに、見せておけば、何か、選ぶときの1つの基準にしてもらえないかなということでやっています。

今、私たちがすごくやりたいのは、先ほどの、ちっちゃい2坪のところやってみて、これをもっともっと拡大させて、みつばち百花ガーデンというのがどっかにできればいいなということで、今ちょっと国分寺の地主さんと交渉はしてるんですけど、最近、NHKで、何だっけ『クローズアップ現代』もあつたんですけど、市民農園に貸し出したらものすごくもうかるということをやっちゃったんで、なかなか、土地の入手も難しくなりつつあってどうなるのかなということなんですけれど、ぜひやらせてもらいたいなと今、ちょっと交渉中です。蜜源の植物を植えたり、みんなで景観づくりをしましょうということなんです。もちろん、市民農園もすごく素敵なことだし、いろんな意味で気付きもあるし、いいことだとは思んですけど、私たちはもうちょっと景観までやれたらいいなということで、住宅街の中の空間を、何かみんながなごめる、ほっとするような空間にしながら、虫たちにも喜んでもらえて、虫がよろこべば鳥も喜ぶだろうというような、そういうほんわかしたガーデンができないかなということで、今、土地を探しているところです。

ホームページのほうには、蜜源・花粉源植物データベースということで今220種類ぐら

いこんな形で、検索していただけるようにしています。これは、やみくもに入れてるわけじゃなくて、佐々木先生の本の中から身近な植物をなるべく選んでいること、それぞれ自分たちで、育てたりちゃんと観察したりして、ミツバチが来ているということを確認したものだけをこうやってアップしています。

これは、何ていうか余談ですけど、国文学者の中西進先生が「幸福とは、花が咲き広がり、咲きつづること」ということで、さきはひ、というところから、語源がそこにあるということで、花が咲いてこうずっとどんどん咲いていくっていうことは、人の幸福にもつながる。それが、ミツバチの幸せにもつながれば、何かいいなというようなことでやっています。

以上です。どうもありがとうございました。(拍手)

村田：朝田さん、ありがとうございます。では、那須さん、お願いします。

2.5 那須 守氏（清水建設株式会社 技術研究所 都市緑化グループ長）

企業と都市の自然・生物多様性再生

那須：清水建設の那須と申します。よろしくお願ひいたします。

私のほうからはここにありますように、企業とか、まあ企業用地の視点から、都市の自然とか生物多様性、それを少し報告したいというふうに思っています。パワーポイントは 15 分の時間で 24 枚用意しましたので、少し早くなるかもしれませんがご容赦ください。だいぶディスカッションの時間がなくなってきてますのでなるべく早く終わるようにいたします。

お話しすることはこの3点です。最初に、都市の自然・生物多様性と、都市と自然とか生物多様性、それから都市と企業、自然と生物多様性と企業、これをどんなふうに関係があるかということについて、ちょっとお話ししたいと思います。

まず1番はですね、今まで出てきたように、都市は孤立してるわけじゃなくて、生態系を介して郊外の自然とか、社会的にも自然的にもつながりがあると、こういう概念、バイオリージョンとしてということがよく取り上げられますけど、そういうふうにして考える必要がある。

それともう1つ、これは、COP8 ぐらいから、生物多様性の COP ですね、それぐらいで言われてますけど、都市と企業は生態系サービスの主要な消費者であるということで、どうしても、この2つを考えるには、今後の生物多様性というのは考えなきゃいけない、考えていけないといけないということが分かります。

それからもう1つですね、建築家とか都市計画から、都市計画でやってる者から見れば、この都市の生活質というのは自然環境にかなり関係するんじゃないかというふうに思われ

ます。下のグラフはですね、私たちが首都圏の都市生活者にアンケートを取ったんです。街の個性と思われるものということですね。そうするとですね、公園緑地が多いとか自然の風景がよいとかですね、美しい街並みとか並木道ということですね、自然の要素というのがかなり上位に来てると。

歴史的にも大切なんだけど、自然のほうが、結構注目されてる。それはなぜかという、直接的に人々の生活に結び付いてるということではないかなというふうに私たち理解しております。こういう都市の自然とか生物多様性というのは、企業にとってはビジネスチャンスでもあり、リスクでもあるというふうに言われてます。

この図はですね、企業が生物多様性とか自然に取り組む。インセンティブというのを少し整理したものなんですけど、ここが、ちょっと見づらいです。青いのがリスク、それから赤いところがチャンスということですね。

そうすると、リスクで見れば、ここである評判リスク的なことが、結構多いんですけど、チャンスという面ではですね、この絵にあるように、自然に配慮することによって建物の容積率が増えると。そうすることによって、事業、お金もうけがあるいはできるという。それからもう1つですね、大学の例で、これ私のかかわったことなんですけど、学生さんが生物多様性とか自然にかかわることによって、それを市民と活動することによって、学校というか予備校も雑誌等に取り上げられて受験生が増えたり、それから、その大学のブランドが上がってきたりとそういうようなことがあります。そのほかに、不動産価値の向上とか、それから商業施設で言えば、集客率の向上等、いろんな面で効果があるんじゃないかなと言われております。

これからですね、今企業はどういうふうに考えているかといいますと、もはや CSR という観点では、じゃなくて、ちゃんと自分の実業と結びつけた点で、そういう自然保全とか生物多様性を考えていかなければなんないというふうに言われています。

まあ実際に、これは、その企業の企業緑地について、これは都市緑化基金というところがですね、生物多様保全につながる企業のみどり作戦ということで、認定しておりますけど、このようにですね、品川とか江東区とか新宿といったところでも、都心でもですね、生物多様性に貢献できるような、こんな土地が、結構見られてきてるといったような時代になると思います。

その点、私たちは建設会社なので、都市ということで必ずしも、地面ばかりでなくて、屋上緑化とか壁面緑化、そういうところを、緑化と生物多様性に配慮するということです。そういう、いわゆる私たちはグリーンインフラと言ってますけど、そういうものを作り出すといったようなことをやっております。

それをやるに当たってですね、常に検討してるのは、その価値は何だかということ、なるべく、お客さんに分かりやすく説明するといったようなことで、例えば生物多様性保全の価値とか、それから人とか社会にとっての価値とか、それから経済価値。そういうものの具体的に明らかにする。いったようなことをやっております。

1つの例ですけど、比較的大きなスケールの都市の生物多様性を評価を行って、その事業値が生物多様性の保全の上で、どれだけの価値を提供するかといった、そういう戦略的に考え、そういったようなマップづくりとか、それから実際に作った場合、生態系ネットワークとか、その場所の生物多様性といったことにどれぐらい貢献できるかといったようなそういうことを指標化して、なるべく定量化する、いったようなことをやっております。

最近ではですね、先ほど東京都さんのお話がありましたけど、市民と企業が共同する自然環境づくりというのが恐らくこれから、いろいろ出てくるだろうということで、そういう支援するためのツールなんかも使いながらやっております。これはビオトープの計画から目標設定、計画シミュレーションといったところを住民参加で行うといったようなシステムでございます。

そのほかに、生態系サービスと言えば、文化的サービスという面があります。先ほど、グリーン・ツーリズムで行くことによって少し癒やされるというかそういう体験をするんじゃないかということがありましたけど、都市の緑でも当然ながらそういう体験をするわけです。それを唾液のアミラーゼ成分等を使いまして、どれぐらい効果が出るのかなといったようなことを科学的に分析するということとかですね、それから、そういう効果が社会的にどういう金銭的価値があるのかな、いったようなことを環境経済評価を使って、評価したりしております。

これは、この前の COP9 でもドイツが、あのドイツ銀行が TEEB という経済価値評価というのが今後重要になってくるということで提案しましたけど、企業がかかわってくるということにはですね、こういうようなことをやっていくということが、かなり推進するドライビングフォースになるんじゃないかなというふうに思っています。

続きましてですね、私たちが、やってることを少し説明いたします。実際にやってることですね。これは私の研究所ですけどそこに、幾つかの緑地があります。そこで、どのくらいのもを作れば、生物に対してどういうふうに変ってくるかなといったようなことをやっております。過去に、こういう 10 平米ぐらい、それから 100 平米ぐらいのものを作って、それが生物にとってどういうふうに、どのような役割を果たすかというのをやっておりましたけど、4年ぐらい前にもう少し、ワンオーダースケールアップしましてですね、1,000 平米ぐらいの緑地を作ると、生物多様性上どのような効果があるかといったようなことをやっておりますので、それをちょっとご説明したいと思います。

このようなデータというのは都心ではほとんどないということで、私たちもどういうふうになるかということを楽しみながらやっております。

面積は 2,000 平米ですね。そのうち 1/3 ぐらいが水辺です。作ったときのコンセプトとしては 21 世紀に失われた人と生き物との関係の再生ということですね。都市の生物多様性の再生とか資源の再生とか生活環境の再生、そういったようなテーマにやっております。これが、できるまでですね。ここに、こういうような都市型のビオトープを作りました。それで、この下にあるのが横断の断面ですね。水辺から、それから水生植物、水辺林、雑木

林、装置、樹木林ということで、通常のリアルな視点ではですね、大きなスケールであるものをそういうふうにごちゃごちゃとコンパクトにして作り上げたといったようなものです。この中心部は、サンクチュアルというふうにいたしまして、浮き地をもうけたり、それから湿性植物をもうけたり、それから、崖地なんかをもうけております。

実施に当たっては、生態系ネットワークの調査評価をやっております。これはもう人工衛星の画像でやっております。赤いところがですね、緑地の部分です。調査の結果は、こういう形になって、カワセミがいたということで、カワセミを代表的な指標にしております。それを、もう少しこう、GIS を使って科学的にネットワークで評価したり、それからそれぞれ水辺を作ったらどういう効果があるからといったような、そんな分析をしながら、計画を進めておりました。

既に実施して4年間ぐらいたちましたけど、そのモニタリングの評価をやっております。ここでは比較的、面白い結果を得られた鳥類と昆虫の話をしてします。

まず、鳥類は、ここにありますように、1,000 平米ぐらいのものを作ると大型のサギとか、ゴイサギとかアオサギ、コサギ、ゴイサギ、アオサギ、こういった大型の鳥類が来てくれるというところなんです。この場所は、東京都から5キロぐらいの場所なんですよ。周りはどういう環境であるかということと高層住宅がすごく建ってる。そういうようなところでございます。そこでも、1,000 平米クラスの緑地を作ると、これぐらいの生物多様性の保全ができる。カワセミも近くに飛んで来てくれるといったような状態ぐらいにまでできます。

面白いなと思ったのはトンボです。水場作ることによって、江東区で確認されてるだいたいの7割ぐらいのトンボが来てます。チョウチョの5割ですね。あとは、東京都のレッドデータブックに載ってるようなものも6種ぐらい来たりしてます。

それで、こういうものを作ると、作りっぱなしでなく、実際に環境がどういうふうにつくり上げてられていってるかといったようなことを評価しながら、改良してというか、つくり直しをしていくというようなことが必要ですので、私たちは目標値を短期目標値と長期目標値ということで、目標値を2つのレベルに分けてやっております。短期というのは大体1年から3年ぐらいで実施できるもの、それから長期というのは5～10年、長期的に少し考えなければなんないなというものでやっています。

結果はですね、現在3年たって評価したところで、短期目標値はほとんど目標に達してて、長期でも長期目標に対しては、トンボが先ほども言いましたけど結構いいところに来てるといことです。あとは、チョウチョに関してはもう少し樹林の林床とか草地、そういうところを樹立しなければならないからということで、ススキを植えたり、そういうことによって、改善を図っているところです。

月並みですけど、ヒートアイランド効果といったのがどれくらいあるかといったもので、これはアニメになってます。ここが壁面でここが屋上緑化、ここが平地の屋上ですね、ここが壁面緑化、それからビオトープというふうにごちゃごちゃと覚えていてください。だんだん時間がたって、今10時ぐらいですね、12時ぐらい、13時、14時ということで、この壁の

部分が 50 度ぐらいになるわけですね。それに対してこの緑地の部分は 30 度ぐらいということで、明らかに 20 度ぐらい差が出てくるんです、表面がですね。それを気温にするとですね、大体、緑地と水では 1 度ぐらい、それから、気温で 2 度ぐらい下がると。これが、これを大きくすると、これをたくさん集めていくとヒートアイランド化といったようなことができるということに。

それからですね、これから企業だけでなく市民の方と一緒に、緑地の計画から維持管理まで全体を作っていくことが多分必要であるということで、そうすると、何がしかかわってくれる人にインセンティブが必要かなということで、その抵抗効果っていうものを今、ちょっと評価しております。これはですね、緑地の管理活動をやった後でどれぐらい精神的・心理的にいい効果が得られるかといったようなこと、効果を分析したものです。ここで見ますと、緊張、不安とかですね、抑うつとか怒りとか、それから混乱、こういうものが低下して、それでまあ、精神的に安定してくれるといったようなことが分かります。

それからもう 1 つ、これは唾液のアミラーゼで、ストレスの緩和の状況を調べてますけど、高いとストレスが高いというふうにみなせますけど、こういうように高いストレスの人がこういう管理するとかなり低下するといったようなことが、今われわれが調べた実験の中で分かってきてます。

あとそのほかに、こういう緑地というのは、子どもから大学まで、いろんな環境教育の場としても使えるということで、私たちは、文部科学省のサイエンスキャンプという科学教育の環境プログラムとして、実際に今やった緑地にどういう機能があるかということをも具体的に分析したり、測ったりということで、実際の緑地の効果、意味合いといったようなものを理解してもらおうといったようなことをやっております。

最後に、都市から自然を考えるということで、生物と人の生活環境の再生から考えると、どんなことがこれから求められるようになるかということをも、私なりに試案として整理したものがこれです。

3 つありまして 1 番は、自然の持っているポテンシャル、それに適合したものを作らなきゃなんない。それから 2 番は、再生するインセンティブですね。生物再生をする誘導するインセンティブ、そんなものが 1 つないとなかなかできないんじゃないかなと。それからあとは、実際に活動を経済的に持続できるこういう施策とか社会システム。そんなものが必要なのかなというふうに思っております。

以上です。(拍手)

村田：皆さん、ありがとうございます。それでは時間が少し押ししておりますが、休憩を少し取りまして、16 時 5 分から、後のセッションを始めてまいりたいと思います。よろしくをお願いします。

(休憩)

3. ディスカッション

村田：それでは時間になりましたので、ディスカッションを始めてまいりたいと思います。

それではまず、コメンテーターの北山さんからお話をいただきまして、そこをきっかけに、相互にディスカッションに入ってまいりたいと思っております。では北山さん、お願いいたします。

3.1 コメント：北山 晴一氏（21世紀社会デザイン研究学会会長）

北山：はい。私の持ち時間が10分ぐらいなので、機関銃方式で、お一方ずつに質問といただきますか感想のような形で、私のほうからコメントを述べさせていただきます。

最初に、萩原さんとですね、それから和田さんかな、お話しされた地域ですね、実は私の昔の活動地域と非常に重なっているんで、私、高校が立川高校だったんで、やほとかやぼとか言いますがけれども、私にとってはやぼ天とって天神様があってですね、そこに立川高校の裏門からですね、走らされた嫌な体験と結びついているんですけども、和田さんが話したのもそうなんですけども、あの辺にはですね、高校のときの同級生がたくさん今でも住んでいまして、今の日野の市長は馬場くんまだやってんのかな。日野とかそれから青梅とかというところには、高校の本当の同学年の人が市長をやっていると。調布も市長やってましたけども、そんな感じですごく親近感のあるところなんです。

そういうところで、皆さんが活躍されてたということを知って、非常にひとごとじゃない。それから、朝田さんのお話も国分寺市ということで、わたしは小平のときに中学校とか高校行ってきましたので、その点から見てもものすごく親近感ある地域の話だったんで、非常に聞きほれてしまって、コメンテーターとしての役割を忘れて、なるほどなと思って感心してたんです。

萩原さんにいろいろお話しいただいて、私のほうでこういうことはどうなんだろうかということなんですけど、まず、大学院のころから子どもを連れてやぼの耕作団にかかわっていったということで、ご自分の生き方の流れの中で、これまでの活動ということをもとめておられて、その中で、やっぱりキータムとしては「身の丈」ということですよ。「できることから」という、そういうお話をされたと思うんですね。

それは非常によく分かるんですけども、昨日、初日が終わってその後関係者でちょっと打ち合わせみたいなことをしたんですけど、そのとき山澤先生から、社会デザインであればある種のモデルみたいな、到達目標みたいな、やっぱりあるんじゃないかということ言われたんですね。私はですね、到達目標とかモデルみたいなもの、例えば社会デザインモデルみたいなものを作ることにむしろリスクみたいなものと言ったんですけども、ここでは逆にですね、萩原さんの場合は、身の丈とかできることからというお話しされて、そういうのは非常に納得いくんですけども、1つはですね、やっぱり萩原さんなりの到達

目標みたいなのは何なのかと。どこに置いてあるんだろうかということですよ。それは、活動の内容の面でもそうだし、それから研究者としての目標みたいなのについても、今日お話しされた枠の中でどういうところに到達目標みたいのを置いてるんだろうかと。少なくとも幾つかの段階で、この段階ではどういうところまで、考えられればいいなとかって、そこをお話ししていただきたいと。

それからもう1つは、いろいろ活動されてきて、それで何が変わったのかという。その辺についても、きちんとまとめられないかもしれませんが、実感なりでも結構ですのでお話ししていただくとありがたいですが。まず、じゃ、萩原さんから。

村田：全部聞いてから。というのは時間が多分、足らないので。

北山：それでは、全部聞いてからということで行きたいと思います。村上さんについては私のほうでお聞きしたいのは、建築のほうでよく言うんですけども、入れものが先か、中に入れるもの、インが先かということなんですよ。いろいろな、活動とか事業をされていて、そのときに場を作ることを重視されてるのか、それともそこで何をやるかということとをまず考えて、その後に場が来るのかという、その辺のところをお伺いしたいというふうに思っておりました。

それからもう1つはですね、楽しければいいのかという質問の仕方があるし、それから楽しければいいじゃないかという質問の仕方があるんですよ。村上さんご自身は、その辺の兼ね合いみたいなものをどこに置かれてるかと。それは最初の質問と結びついてくるかもしれませんが、そうじゃないと色々な社会的な意義のある活動がお楽しみ、つまり消費社会の中での1つですね、商品で終わってしまう可能性がある、危険がないかと、そこを、お伺いしたいというふうに思いました。

それから、和田さんについてお聞きしたいことはですね、最初のほうに言われていたキーマンをどうやって発掘していくか、そして連携していくかというお話されましたけども、その点について先ほどお話があまりなかったように思われるので、そこについてぜひお伺いしたいと思うんですね。

まあ、企業にしてもそれから行政にしても、それからNPOしても、キーマンがいて、その人がいないと、継続的な事柄が行われない。キーマンをみつけたときのリスクもあって、これはあの文化芸術活動に関する自治体の中での活動を前やったことがあるんですけども、そうすると、キーマンになった人は、例えば行政の中だと、企業でもそうかもしれませんが、それしかやれなくなっちゃうと。その人の人生プランがそれで狂ってしまうと。ものすごく、そこで扱っている環境なり、あるいは人権なり、あるいは活動なりということをやっていくと、そこだけのプロパーの人と見られてしまって、ほかのところになかなかいないと。ただし、活動のほうから見るとその人がいないと困ることになるんですよ。それをどういうふうにお考えになっているのかということをお伺いしたいと思いま

した。

それからですね、5人の方の一人一人についてレポート書かなきゃいけないみたいに学生みたいですけども、朝田さんのお話は、もう最初から最後までずーっと感心しきって聞いてしまってますね、こちらのほうでこのことはどうなんだろうということを考えていると、その次にすぐにそれに対するご自分なりの回答を用意されているというような形で、本当に感心していたわけなんです。関心ばかりしてはいけない、幾つか言わないといけないですけども、今日のお話で一番印象に残ったのは、方法論といいますか、そもそもですね、食育からというふうにお話しされたんですけども、その後、ミツバチのほうから世の中をながめていくというふうに変わっていて、そのながめていくという方向性はよく分かるんですけども、どうして、どのようにしてながめていくかというですね、それから、さまざまな組織をつくりながら、あるいは、周りの人とかかわりながら、研究、これもうこれ研究なんですよ。市民的な研究、市民研究と言いますか、これももう萩原さんの研究そのものみたいなもので、そのフィードバックというかケーススタディみたいなものだと思うんですけども、そのときに、方法論はどのようにして獲得されたのかというのをものすごく興味深く思いました。

今日の話はもうすべてこれ研究発表という形で、実践と結びついた形で、なおかつ実践を通ったという人の研究プロセスでものすごく価値の高いものだったんですね。やはり、実際的な意味ばかり追求すると、継続的な研究ができない、実践ができなくなっちゃうということがあるので、研究のアプローチをやっぱりきちんと持っているかどうかは大きいと思うんですが、そういった点についてですね、方法論をどうやって獲得されたのか。お1人だけではなくてグループでお仕事されてるわけですから、そうすると、研究なりのグループとしての研究的な方法論の獲得をどういうふうになされているんだろうかということ、とても興味深く思いました。この辺をお伺いしたいというふうに思っています。

それから、那須さんのお話も、企業の中でここまでやるかという感じで、非常に感心してお伺いしました。私のほうでお伺いしたいのは、今、4人の方にお話を聞きしたことと同じようなことも聞きたいこともあるんですけども、特に、那須さんの場合には、いろんないいアイデアがあったとしても、じゃあ、それをどうやって、クライアントといいますか、対象とされる方に分かってもらうのかということですよ。それから分かってもらうにしても、その前にどうやってアクセスするのかと。振り向いてくれなかったら、いくら説明しようとしても駄目なわけですから、どういう形でもってアクセスされようとしているのかということですね。

それから、その場合にクライアント側からの評価はどのような形で今は測っていらっしゃるのかということ。そんな点についてお話を伺えればというふうに思います。

また、後で補足の質問をしたいと思っておりますけども、取りあえず、まず、皆さん方にまずお話ししていただきたいと思っておりますので、私のほうの質問の形でのコメントは、ここで1

度切り上げたいと思います。よろしく願いいたします。

3.2 討議

村田：ありがとうございます。では、どうぞ、萩原さん。

萩原：はい。これ4時半に終わらなきゃいけないそうなので、1分半ぐらいでいきたいと思います。

到達のモデル。これは、私も北山先生と一緒に必要ないというふうに思います。こうあるべきだなんていうものは、それぞれの考えるべき姿のものだと思います。

それから何が変わったのか。時代が本当に変わりました。私がこの修士論文をお茶大で書いていたときには、ライフスタイルの選択、都市住民の自給的生活の試みというのが修士論文のテーマでした。そのテーマをやったときに反体制的と言われて、エコロジー何だと言われて、そういう時代でした。ですからそういう都市の中で農業をやる人たちはやっぱり活動家ではないか、運動家ではないか。そういう運動家の人たちのことを調査するのは、本当に研究になるのかとか様々なことを言われました。

しかし、今は大きく変わりました。その当時オルタナティブだったものが今は支配的になりつつあるので、また私にすると、今度はまたさらなるまたオルタナティブというものを常に探していく必要があるんじゃないかなというふうに思います。

それからもう1つ何が変わったのかというのは、私がテーマとする子どもとエコロジーだったんですけれども、子どもたちがそういう大人たちの姿を見てどういうライフスタイル、生き方を選択していくんだろうかというのが私にとって非常に大きなテーマでして、その後ずっと実は追っかけました。やぼ耕作団に来ていた子どもたち。やはり親と全く同じではないんですけれども、やはり親たちが選択していた、やはり自分たちで食えるようなそういう生活というものを実は、選択していった子どもたちが多かったということです。それからそこにかかわっていた大人たちが、やっぱり生き方を変えていたということです。その人たちが畑がなくなってしまったときに全国に散り散りになったのですが、その場でまた新たなことを始めた。だからやぼ耕作団は自分たちにとって学校だったというふうな言い方をしていました。ですからそれ、いろんなところに波及効果を及ぼしていったと思います。

何よりも変わったのはうちの夫で、自宅の庭を掘り起こしたりいたしました。それから、28になる娘は、昨年、お母さんは言うだけ、私はやると言って隠岐の島に結婚して行ってしまいました。今、実践をしております。その娘が2歳、3歳のときに1年間通っていく中で、彼女はあのやぼ耕作団で畑仕事をする中で、3歳のときですけど、お母さん、大人っていろんな人がいるんだねと言われました。いろんな価値観を持ってる人がいるんだね。それから、食べもの、作物ってこうやって育つんだね、虫がいっぱいいるんだね。

そういうことを三つ子の魂百までもだったんでしょう。大学を選ぶときに私は農業大学に行くと言って東京農大に行きました。だから何らかの影響というものがある。それが大きく変わっていく、またそういう人たちが、わが娘も含めてですけども次の世代を育てていくときに、どういう価値観を持って生きていくのか、それはもうもちろん人それぞれなんですけれども、そういう1つの方向性というんですかね、多様な生き方がある中の1つを示せたというのがやば耕作団の人たちの活動の意義だったのではないかなというふうに思っています。

ちょっと長くなりました。

村上：ご質問なのですが、入れものが先か中身が先かと、何を重視されているかという、先ず最初の質問ですけども、観光をやっている人間といたしましては、それは非常に重要な問題でありまして、今日は21世紀社会デザイン学会でありますので、そういう意味からして、今日、話をさせていただきました例えば越後田舎体験の例を挙げてお話ししますと、あそこの地域は、もしあの取組みをしていなかったら、あそこには人は誰も行かなかったと思います。どんどん過疎化が進んで、若い人たちは街に出てしまい、高齢化が進んで、今でいう限界集落みたいになってしまったと思います。

そうならないようにということで、あの辺の頸城郡の6町村だったと思いますが、その人たちが立ちあがったわけでありまして。ですから、やはりこの地域を何とか生かしたい、活性化したいという思いがあったわけでありまして。活性化するということは、外から人に来てもらえるような地域にしたいというような思いが、あの地域住民にありまして、そこから立ち上がってああいう形になったわけです。

それで、何が自分の地域の売りになるかということを徹底的に議論した場合、当然、自然とか文化しかないわけですね。そこに何か大きなテーマパークがあるわけではないので、すからこれをとにかく売っていこうと。その時に要するに「本物」ですね。本物の体験を売っていこうというところからスタートしたわけです。ですから、何が先かというとはやはりその地域の人の思い、意欲、熱意など、そういうものが先だと思えます。

ただ、だからと言ってそれだけでは観光的には人が来ないということです。やはりそこには入れものが、入れものというかですね、ここで言う「入れもの」という意味は、建物ではありません。越後田舎体験という体験観光の「システム」です。メニューを整えて、そこにインストラクターを付けて、それからもちろん来てもらうためには安全な面も考えて、それから2泊3日が原則ですけども、そのうちの1泊は民泊をしてもらうというように他の地域にはなかなか出来ない「売り」を作り、もう1泊は地域の宿泊施設に泊まってもらって、地域の宿泊業の方にも、お金を落としてもらうというような意味での「入れもの＝システム」をきっちりつくるといふことでもあります。

これは口では簡単なのですけれども、やはり10年かけてつくり上げたということでもありますので、何が先かと言われたら当然、意欲とか意志とかが先なのですが、それをうまくビ

ビジネスモデルとして、例えば、エコ・ツーリズム大賞の優秀賞とかそういう賞をいただけるまでにするには、ある意味での入れもの、ここで言う入れものは先ほど言いましたように建物じゃなくて地域全体のシステム、そういうものをつくり上げていかなければいけないというように思っておりますし、観光の面で言うと非常にそういうものが重要であるといことでもあります。

それから、2つ目としましては楽しければいいのかというような質問でございましたけども、観光というかツーリズムですから、そういうふうに分かれば、楽しくなければ観光じゃないと。楽しくないところには誰も行かないということでは、楽しければいい。楽しくなければならぬということなのですけれども、ただ、こういう体験観光、今日の私に与えられたグリーン・ツーリズムの面などで言いますと、ただ楽しければいいというものではないということも言えます。要するに内容が農作業とかですね、それから雪国だと雪の上を歩いたりとか、労働や体力が伴い、そういうふうな汗水たらすわけですね。

例えば、田植え体験。お米はどうしてできるものだろうというのを都会の子どもたちは、多分、1度も体験してない子たちばかりだと思うのですが、要するに、子どもたちの中には、田んぼに入ったことない子どもたちが沢山いるわけでありまして。あの、ぬるっとした中、田んぼの中に入れないという子どもたちがいたりするわけですね。そういう意味では楽しくないかもしれないのです。そういう体験を無理やりやらされてしまうかもしれないのです。

ですけれども、それがやはり、農家民宿とかそういうところに泊まって、本当に農家のおじいちゃん、おばあちゃんから、こういうふうにお米ができるのだよとか、野菜はこういうふうに入土の中にできるのだよとかいうようなことを教わりながら体験して、そして秋には自分たちが植えた田からお米が取れたというような、まさに感動ですね、それを得たときにそれが楽しくなるというような意味があるわけです。

ですから、今日のグリーン・ツーリズムだけに限らないのですけれども、私の持論としては、観光というのは、特に今日のグリーン・ツーリズムは、特に自然と体験、それにそこにいる人。人との出会いですね。それがすべて合わせ持つて、感動がもらえると、それが、楽しさにつながるのではないかなというように思っております。

その体験なども、とにかく、私、「ほんもの体験のすすめ」というふうに最初言いましたように本物でなければならぬと。要するに何が本物かというのは、地域に行って、とにかく本物を体験するという意味での本物であります。偽物が非常に多いわけですね。バーチャルの世界とかそういうもので、何かこと足りているというような意味合いが多いのですけれども、そういう本物を体験することによって、感動を得ると、そこにはやはり、意図を持った人たちがいるというのが、楽しさにつながるのではないかなというように思っているところであります。

以上です。

和田：はい。では、私のほうのご質問で、キーマンの発掘という部分なんですけれども、キーマンと言ってもいろいろあるんですけれども、先ほどちょっと申し上げた中で、例えば企業の部分ですね、組織的な部分での企業としてのキーマンの部分は、確かにですね、私も先ほど申し上げました大企業を中心に回してるところがあるので、正直言ってかなり社内の異動とかもあってですね、変わってしまうというのは結構現実的ではあります。ただ、なかなか社内の事情とかもいろいろあるので、それを、変えないでくださいということもなかなか難しかったりして、1つの仕組みとしてある程度その周辺のところとか、直接的な担当ではなくても、その辺、周辺で何かかかわるような仕事に別に異動して、また何年かしてまた戻ってくるとかですね、ある程度そういう複数の人で回していけるのかでしょうか。そういったもので、誰かだけで回せるという仕組みじゃなくて、複数の人が担うような形ってというのは1つ考えられるのかなというふうには1つ思います。

それは行政のほうでも同じでして、正直私も今2年目ですけれども、私の仕事の中で許可の仕事とかも持っていてですね、ある意味、いいことじゃないんですけども汚職とかそういうことがある可能性があるもので、ずっと長く今の部署にいられないですね。行政のほうはある意味、複数の人で回しているというところの組織であるので、そういったことで1人だけのキーマンというより複数の人で担うような形が1つ考えられるかなと思います。

それから、外のNPOとか、農業をやった人だとか、そういったところのキーマンの発掘はですね、都としてボランティアの育成講座とか、ボランティアの人の指導者を育成するような講座というのをやっているんですけれども、そういったことで日ごろ地元などですね、いろんなところでボランティア活動している、いた方の養成講座というのをやってみる中で、キーマンとなる人を見出していくような形、現実的にそういったことでつながることで、養成活動に取り組んでる面もあるんですけども、そういったことで発掘するのが1つあるかなと思います。

それからもう1つは、ちょっと語弊があるかもしれないですが、行政から見たクレーマーとかですね、行政に対して強く何か自分の主張をぶつけてくるような人。というのが、1つのキーマンになり得ると思ってます。先ほどちょっと紹介した、私の事例の中でも、実際、企業と一緒にNPOとして活動されてる中には、行政に対してもの申すみたいな形で強く言ってきた方で、だんだん行政とうまく連携するような形に変わっていったというところもあるので、そういう方を行政としていかに付き合っていくって、その活動のキーマンになってもらうかというのも1つの発掘のやり方かなというふうには思います。

以上です。

朝田：では、私のほうは方法論の獲得ということですけど、はっきり言えるのは科学的なアプローチをどれだけできるのかということだと思うんですね。私たちは本当に幸せなことに、ミツバチ科学研究センターの中村純先生と一緒にずっとやってきていて、その影

響がとても大きいんです。例えば、ハチミツからだけだと、ああ蜂蜜取れた、よかったね、ここはいい環境だねっていう、それで終わっちゃう。それをもうちょっと違う角度から見る。違う角度っていうのは、要は科学的なアプローチをできるかできないかということなんですけれど、例えば、今年 COP10 が行われた名古屋で、よく記事に出ていたのが、たった1つか2つの巣箱を屋上に置いただけで、地域の生物多様性をこれで目指しますなんていう記事が平気で出てしまう。

今、すべてがそうなんです。短絡的な記事しか、記者の力がなくなって、その科学的な判断さえもできないという。裏を取ることをさえないという、そういう情報があふれている。その中で、どれだけ自分たちが、地道な活動ができるかというのはやっぱりそういう科学的な裏付けというのがとっても重要なんです。

じゃあ、それが、科学者がそれがどれぐらい、こういう私たちのような活動をケアできるか、サポートできるかっていうと、これはやっぱり、とても難しいところで、私たちと中村先生はいろんな会話を、ミツバチとか蜂蜜をテーマにしながら、お互いに気付きあったということが大きいです。例えば先生が何かの拍子にぼろっと、花粉でミツバチは増えるんだよねってつぶやいた一言に私たちは、え？ 何それ、っていうことで、先生にとってはもう当たり前のことなんだけれど、私たちにとってはとても新鮮な驚きがたくさん、それが代表的なものですけど、そんなことの積み重ねなんです。そこで、本当に科学的にもものを見ることの大切さ、面白さというのをすごく知りました。

それは私が食育から入ってるから余計それを感じることで、添加物の問題だとか農薬の問題だとか、食の世界ほどぐちゃぐちゃになっちゃうところはないわけで、そこで私自身がどれだけ本当の情報って何なんだろうって、今もですけど、ずっとそれを探し続けて、自分の足で歩いて、作っている人のところに行き話話を聞いたり、いろんな情報を取って、それで最後やっぱり、最終的に決断できないようなことがいっぱいある。そういう中でミツバチも蜂蜜もその1つで、あの、どれが本当なんだか分かんない。

そういう中で、そういう科学者の人と一緒にできたというのはとても大きくて、私たちも別にそれを盲信するわけではなくて、やっぱり1つやりながら、これは納得したねと、それはみんなで話し合いながら、どんどん疑問を出していく。それで、次のステップに進むっていうようなことをやってたってことは大きいと思います。

科学的なアプローチっていうと何かまるで、すごく足かせができたように思いますけど、逆にものすごく間口が広がって、どんどん、どんどん、奥深くに入っていくと、またもっと面白くなってくる。花と人との、花と虫の関係さえも、表面的に見れば、ああ、花に虫が来てるで終わっちゃうところが、例えばですよ、ツタなんていうのは蜜を出す時間が2時から3時って決まってるんです。その間だけミツバチがなぜか分かって行くっていう。それだけ聞いても、もう何か私たちにとってはとてもわくわくすることで、そういうことの積み重ねが今に至っていると思います。

那須：私のほうから最初に、どうやってクライアントに説明するかということです。

先ほど、朝田さんのほうからありましたけど、まさに科学的に説明するということです。クライアントに要はデータを通じて説明すると。そのために何をやってるかということ、例えば先ほどのビオトープを作って、10 平米ぐらい作ったらこうなって 100 平米で作ったらこうなって、1,000 平米で作ったらこうなった。ここまでいけるといったようなものを、エビデンスを作っていくということです。それほど、例えば、人の成功に対する評価とか、それから、経済活動の評価とかそういうことをいろいろやっています。

エビデンスができたからそれから何をやるかと言うと、次に、エビデンスというのは基本的に現象評価したものです。最終的には計画をシミュレーションしなきゃなりませんので、そのシミュレーションするようなモデルを作る。予測するというのをやっています。そうしないと、なかなか、このクライアントは納得してくれないし、クライアントよりもわれわれの設計のほうがもっと厳しいです。

例えば、緑地 100 平米作ってこれ何の効果あるの？ 花がいいの？ 木がいいの？ ということとちゃんとやっぱり説明できないとやっぱりなかなかやってくれない、ということです。

それから 2 番目ですね、どうやって、クライアントにアクセスするかということですが、正直言いましてこの仕事を始めたのは 10 年ぐらい前から始めたんですけど、当時、これに目を向けてる企業はありませんでした。そこで何をやってたかということ、やっぱり、自分たちで 5 年先を見すえてどういうふうやっていくかといったようなことを問いながらやっていきました。

それがだんだんと蓄積していつ外に出せるものが出てきたなというような状況です。今も、この前 COP10 が終わりましたが、この COP10 終わって 5 年先にどうなってるかということ、われわれなりにシナリオを描きながら、やってると。そういうのを、いろいろこう、勉強できたものを、提案していくと、中にはそれについて賛同してくれるお客さんがいると。ということで、それが、だんだん、だんだん増えてきているというのが現状だと思います。

今、やっぱり、ニーズじゃ駄目でシーズでやってかなきゃ駄目かなというふうに思っています。

それから最後ですね。クライアントの評価ですけど、この手のものはですね、お話のときも言いましたが、やはり今や CSR じゃちょっと難しいんじゃないかなというふうに思っています。できるだけそのお客さんのビジネスと結びつけて話さなきゃならないのかなというふうに思っています。必ずしもですね、そればかりじゃないと思うんですけど、やはり、うまく進めるには、そういうものということで、あとは、そのために、例えば企業だけじゃなく、そのほか、施策を推進する行政と一緒に仕事をやる、そういうふうなことをちょっとやったりしています。

以上です。

北山：補足の質問みたいなこととしてよろしいですか。

社会デザイン研究学会で社会デザインをする人のことを社会デザイナーというんですけども、昨日、中村先生からも言及がありましたけども、その中にコミュニティーデザインという概念聞いたのですが、コミュニティーデザイナーということ、言っているんですよね。世の中にコミュニティーデザイナーが増えることを、今、学会として目指しているわけなんですけども、今日、お話伺った皆さん、本当に、コミュニティーデザイナーであるし、ある種の社会デザイナーでもあると思うんですけども、例えば和田さん、それから那須さんの場合、特に、お聞きしたいんですけども、仕事の中で、今日お話ししていただいたようなことをなさっているわけですから、いつ、職種が変わるかもしれない、あるいはいつ人が変わるかもしれないという状況の中で、例えば、仕事の本来の中身が変わったとしても、これまでやってきたことをどうやって自分の中で継続していくのか。これまで築かれたいろんなネットワークを、これからもどうやって維持していかれるのかということについては、どんなふうにお考えなのかということ、特にお聞きしたいと思います。

和田：では私のほうからまず。今、私は緑を守るような仕事をしていて、市民の方とかいろんな方とかかわる仕事をしているんですが、それまでの職歴として、例えば、消費者行政でしょうかね、消費者団体の方といろいろお話をするとか、あと、初めて自分が管理職になったときにはリサイクルとか、ごみとかですね、そういった仕事をしていたんですけども、そこで逆に本当にいろんな、行政だけじゃなくて、いろいろ、市民の方とか団体の方とかいろんな方々とお話をする機会があったんですね。

それが逆に今のポストになって、当然のことというか、いろんなネットワークも今でも細々とつながってるところもありますし、考え方とかそういったことがやっぱり自分の仕事の中で生かされてるなというのはあるので、今後も、個人的には私、いろんな外の人とお話をしたりとかですね、仕組みを考えたりということが非常に好きなので、特に自分で、下水道とか、リサイクルとか含めて環境的な仕事を、やっているのでもそういったことにつながっていくことが仕事としてできればいいなと思っています。

あと、1市民としての立場の部分は、まだ具体的な何か団体に属してというわけにはいかないですけども、非常に小さなものですけど、例えば、町内会とかですね、自分が住んでいる地域っていうものに対して、わりと関心が個人的にはいくようになってるので、そういったところで、環境保全だけじゃなくて、地域のことを考える仕組みというのはできていけばいいかなというふうには思っています。

那須：私自身は、十数年ぐらい前からこういう仕事を始めたんですけど、上司にこういうことが必要ですからこういうことをやらせてくださいということでやりまして、それをそのまま今まで維持できてるから、そういう問題にはなっていないんですけど、少なくとも、私

は建築なんですけど、建築という立場を考えれば、こういう都市とか自然というのは必ずつきまとうということで、例えば現場にいても、設計にいても、どういう場にいても多分、私がかかわることはできるんじゃないかなというふうに思っています。そういう意味では、清水にいる限りにおいては、そんなに心配してない。

ただあともう1つですね、今度仕事変わったらという話ですけど、あとは、仲間同士でこういう環境、いろんな、リサイクル、生物多様性などいろんなことを話し合う10人ぐらいのメンバーがいます。それは、職種は建築だけでなく商社の方もいますし、総務の方もいます。そういう人たちと2年ぐらい、自分たちのテーマを考えて、それを研究してから学会に発表していくとかそんなようなことをやっています。

北山：私のほうでだいぶ時間を取りましたのでどうも、村田さんのほうにお任せして、終わるなり、もう少し時間があれば展開するなりお願いいたします。

村田：ありがとうございます。もう時間を過ぎてはいるんですけども、どうでしょうか。はい。会場の都合もでございますので、申し訳ありませんが、フロアからのご質問等受ける時間がなくなってしましまして申し訳ありません。本日の講演は「自然との共生—都市から自然を考える」というテーマでした。今まで展開されましたように、NPOや行政、それから企業の立場から、さまざまな科学的な示唆の必要性、それからそれぞれの相互の認識というものが、とても大事だということが明らかになったと思います。

こういうことができるのは、21世紀社会デザイン研究会ならではないかと思えます。通常はそれぞれの分野で、狭く深く、研究なり活動なりをしていると思いますが、それで終わるのではなくて、隣の分野、あるいはその隣の分野というところでお互い、認識を確かめあっていくということの重要性というものを今日深く感じた次第でございます。

では、拙い司会ではございますが、本日の講演会を終わらせていただきます。皆さま、どうもありがとうございます。(拍手)